

彼より願戻し候得は關尹とても承知に相成さすれば上にも御氷解眼前に候右一卿願候とて會今更一橋と交戦も致間敷最早主人同様之儀何卒
〳 此儀岩十分説得有之度又内々一橋薩を手に入候手段は無之哉さす
れは實に天下泰平之事再興と存候最早宮中には如何なる才人出頭候共
御氷解は六ヶ敷一橋を可申出之外良策も有之間敷候何卒右等之處岩へ
御議論一橋説得之大功懇願候一橋申候には此姿なれば如何にも十分働
き候得共大樹と相成候は結構過ぎ甚窮屈にて働き候事難相成是非に
御斷と申上候若し被仰付候は、切腹と申候得共諸方々之理解に御請
可相成候旨六條咄に候實に一橋も是迄は天晴有志勤
王之名を顯し候人に候得は何卒此度更に元々改心人望を宗とし候は、
一新改革有之候は、實に被安 叡慮此上之勤王は有之間敷と存候右愚
存申上試候何卒岩へ可然御申談急々其策深慮願候併し淺慮之事に候哉
猶賢策承り度ものに候人待せ法外之亂書御推讀奉願候早々頓首

八月二日

有 任

七〇 岩倉具視書翰「井上石見宛」慶應二年八月七日

昨日細答二通萬々分明深忝候且一書髓に致入手候扱朝議今日に至り候は
は一も可見なく百事去り申候事には候得共爰に行ふへきは唯一事強諫之
道のみ此儀行れ候は、天下之大幸不行して爲差害もなく且列藩有志に至
り一舉傳聞必す 朝議兩端奸臣壅閉之旨趣顯然衆心奮起依頼之根由にも
可相成に付誓て被行度先日來種々苦心既に成功も可有之處正三卿難息に
過ぎ採用に不至大原卿因循遲疑終に見合と相成誠に遺憾之折柄足下にも
此舉可然之見込近頃力を得感喜此事に候依之極密及内談候抑此舉表一と
通りにては甚被行難き形にして内甚た行ひ易き次第に候其故は一體堂上
之弊風一身願慮斷然投身之處置之儀敢る無之事に候得共又高貴兩役中を
恐敬する事拔群之習風に付有様之處今日唯鼓舞之一事に有之候に付貴藩

兼出入之方正三卿へ出頭方今之件々慨歎滿 朝數百之公卿有志之方誰か一人諫奏も無之哉右等之策竊に御勘考も不成哉餘り 朝議一途に御固り玉石混淆列藩有志草莽士之見る處も如何にも遺憾なと御談合に被及候は、彼卿必ず過日云々之儀も有之候得共云々之儀に差留め之旨内話可有候其時深く頻りに幸甚之旨被申解再催促事密に被談候は、此事必可相成候次に兼出入之者大原卿へ出頭天下瓦解立て可待時勢之急務段々被申述最早餘命も無幾老卿一世の力を究めさせられ斷然御諫奏は如何と懇に被申解候は、必ず承伏拔群之事業も可有之次に内公御門流西洞院信堅阿野公誠高倉永佑など竊に御招きにて余か申候とは何處く迄も堅固に他洩不可有候得共 朝廷之御大事此時に可有之候間有志之公卿一心同力諫奏可有之時歎余出張直諫不能者は悉く薩論不可用との 朝議に陥り候儀最早施行すへき策も無之に付兼有之志之趣傳承及内話候尤各情義有別決して是非諫奏を勧め候義には無之候得共庭田大原中御など先達來頻に苦

心彼是其支度も有之旨傳承候間衆力及建言候は、十に七八可被行又不被行して殘害無之歎なと御内話候は、必ず奮起合衆無疑候次に山宮九若公兼御親敷旨傳承に付竊に御一書被爲持辯舌大夫をして御對面に凡内公御模様同斷御申入庭田大原中御など頻に諫奏苦心之旨に付御門流内有志之公卿合體補助可有之候御見込之堂上無之哉と密被仰進候儀は相成間敷哉右四ヶ條足下兄弟御盡力被行候は、斷然直諫 朝議一旦大に動搖可致其時に當り機變に應し又々御良策も可有之と存候尤正三大原兩家之義は他洩之事萬々安心候得共内公山宮御沙汰之處極秘御誓約之程偏に大切と存候毎々申入候義には候得共貴國建言より頻に強諫朝議一新之事日夜朝暮之苦心實に寢食を不安事に候間臣が微忠洞察前文之義出格盡力頼入候中御始め外に十四五人は必ず出來有之候得共右等之儀無之候ては直諫其場に臨み根本弱く始終徹底無覺東吳々配意頼存候也

七一 岩倉具視書翰案

藤井良節宛 井上石見宛 慶應二年八月廿一日

今朝答書萬々分明凡て切耳のみ件々一々仰天之事に候一橋如何に困苦致候とて簡様にも意外に出て候とは實に案外此事に候爰に至り候事 朝廷のみならず天下之大幸不過之候乍去 朝議之大事唯此時と存候に付ても所謂彼の虚實も不存附上り候には無之候得共速に御一新可被遊時節兼有有志之群臣同力斷然建言成功に不至ては一步も不退と申迄の運ひに立至り度ものに候右目的之所 關尹以下四五輩被退候事 櫻木公御再職之事 鷹公以下幽閉之公卿出仕之事是丈け之所は即今被行不申候ては萬々道附不申事に存候復古政之事御委任被止候事 外夷處置之事惣體國是の基本は實に以列藩衆議公平に無之候ては條理不可立事には候へ共夫迄に右丈け之處 朝廷限に被爲立 壅閉の雲霧を拂盡し置候はでは不相成候深く祈念之事に候前文之事件不容易事に候得共此處に候は随分可被爲行運ひも可有之事と存候來會迎も實に堅固不可泄候間何卒片時も早々暫時出

會不可事にや伏る御頼み申入候早々如此に候也

八月廿一日

- 一 列藩衆議之事に候得共勤 王首功之薩長御取扱振一重大事と存候次に列藩議論百端可否御決論之處又一大事右等に付ても前文丈け之事出來無之ては萬々御差支と存候次に橋會等進退御所置又々同斷と存候
- 一 櫻木公御困りにても何卒御再出願度武家貴藩登京又春嶽等盡力御倚頼則壬戌の初めに歸候處次に鷹公三條始め長御倚頼之事萬々順路と存候に付ても吳々本文之處被行度候
- 一 小子今朝文通案外之事に凡る止め候得共大に決心書取候事件も有之是も一應内々一見頼度儀に候
- 一 拙再勤云々之事御懇情如何計感喜に候得共世上解けざる事夫は固結之事にて北氷海之如くに候間迎も 朝に立御奉公は不相叶事と覺悟候乍去往事何とか御沙汰にて一度出仕相成候は、終身之本懷此事に候右は壬

戊以來不計御往反申入候情實御推知是丈け之處相成候得は實に大慶之事に御座候以上

七二 岡田榮吉山名敬之進書翰

岩倉具視宛

慶應二年八月廿一日

橋之處置は春嶽鱗二人之方寸に出たる者と相見候

頓首再拜白益御安泰可被爲渡奉敬賀候就るは本月十七日頃一橋を朝廷へ申立之趣に此度征長之成功相立可申心得に將軍名代として西下之儀願立則節刀をも拜受仕候得共近日九州解兵小倉之陷城藝石之大敗等意外之禍に至り成功之見留も無之相成候右は全幕府に於る癸丑以來失體之事不少人心離叛諸侯瓦解に至り候儀と奉存候間於臣も此上征夷之職掌相受候も奉恐入候間徳川家相續之儀は御請可仕候得共征夷職は奉返上候尤長之戰は暫く相止め其上天下之賢諸侯薩肥前土藝因備等之如き族を被召寄至當之御處置奉仰度赤心に候旨申立候處 朝議も先此儀に決し候由

(岡田榮吉は里見次郎山名敬之進は香川敬三なり)

乍去決評之後尹宮殿下之仰に天下諸侯を被召寄會議致し候得は必紛擾一定難致候間矢張從來之通り萬機幕府に御委任相成候方可然候趣被申候由梅澤孫次郎十八日薩肥前へ使節に相立候由一橋昨日早朝發京下坂致候は其上將軍發喪之合に候勝安房守長へ使節被命候未出立不仕候一橋會候に守護職を辭して歸藩致し候趣御頼候得共會承服不致候由右之事件に大形勢一變仕候に僕等東行も四五日相見合せ橋會勝并に廟堂之御動靜を伺ひ候て之上進退可仕候實は常情を見れば可喜か如く候得共君子之を慮れば甚可憂可恐之情有之様に奉存候尙御熟慮御賢算奉伺度奉願候依之右報知奉申上候頓首再拜白

八月廿一日

山名敬之進

岡田榮吉

上

七三 岡田榮吉・山名敬之進書翰

〔岩倉具視宛〕 慶應二年八月

謹上

山名敬之進

侍史

岡田榮吉

二度之尊翰難有奉拜讀候其件々逐一奉敬承候扱は愈今日に御決定萬事御都合善大幸之事奉存候相模屋に待受候様被仰付候へ共少々市中難離事情も有之候間武者小路新町西へ入松尾伯耆宅へ集り居候手筈に候入谷も同所に出張之約束に候右に付同處迄乍恐御使者御遣し之程奉希候併會は萬暴舉は仕間敷候知光院様御姑息之御事御前も其姑息之命を被爲奉此度之御盛舉を被爲止候處甚感服不仕候元來知光院様之御姑息は今更不及申上況や大義滅親之義も有之斯る大義に當り何ぞ區々繩墨を守るへきに非る也又況や幽閉之義は尋常一樣之小事是等之義御懸念被爲在御奮發不被爲在様には此上大事御勇斷之處如何可有之哉と窃に不信に奉存候御熟慮之程奉伏願候大夫様も御殘念に被爲思召何共同列に可對之御顔も不被

爲在様との御事御心事奉推察如何と御氣の毒奉存候忠孝不兩全とは俗論之義に於忠は父子共其君に不盡候ては不叶義に付其子其君に忠なれば其親も忠となり親も道を不失様相成可申候君に忠を闕く其親に計り孝を盡し候は父子共に忠を失ひ候様相成可申候此等之義は不及申上に候へ共乍失敬任御懇遇言上仕候不惡御推論奉願上候
會藩若や暴舉等有之候は、早速馳て御報知可申上候夫迄は御驚動無之様奉願候恐惶再拜謹啓

八月

岡田榮吉

山名敬之進

對公閣下

〔長秋は井上石見〕

七四 井上長秋書翰

〔岩倉具視宛〕 慶應二年八月廿二日

御書難有拜見仕候如命御案外速に一大機會到來と奉存候有志公卿御合力

斷然御諫奏いづれ此時と奉存候其外思食之趣乍恐奉感伏候櫻木公は御困り之事にも有之可く殊に薩人周旋之様に申は必定しかし右邊は何もかま
 い不申又二公は今形にては相濟間敷被思食候哉櫻木公へ御相談内覽等之
 事は何様可有御座哉いづれ自然御辭職に相成事と奉存候幽閉公卿方之事
 は既に山階公より内府公へ御相談にも相成申候 三ヶ度の幽閉一時に被免可然
 左なくるはケ様の時節押る參
 内等相成候るは却る朝憲も立かれ候故早く被免置候方可然旨ニ内府公にも
 初の方は御上思食には參り候得共跡二度の方は御上の思召に不適旨御咄ニ しかし是も
 同様直諫の事可然奉存候

右に付就るは何も申上事も無之候得共此節一の改必に付るも尹宮は
 兼る暴激之事に振歸り可申時情に御申上げ相成候事故斷然直諫の場に
 到り候は、暴激とのみ被
 思食尹宮の言大に相當り候事に
 御信用有之候は、一端は被退候共跡の煩ひに及候様之事は有之間敷哉
 乍恐初めより大に穩に御諫奏被行候様專要と一向奉念願候事に御座候

昨日は大原公宮へ御參に相成一の改心にて爰に至り候事は天下之大幸
 乍然ねぢの戻らぬ様大に懸念之旨御咄も有之候由今にも會より殿尹の
 所へは入説有之大に心配の旨も有之候

八月廿二日

尙又越公明日下坂速に諸侯御召之事

朝廷より相發候様一々言上之處盡力之賦に御座候

右は不奉願早卒亂毫乍恐奉拜復候誠惶誠恐敬白

長 秋

上

七五 岩倉具視書翰案「井上石見宛」慶應二年八月廿四日

前略

昨日申入候正三大原等極内々一定之事只今承候へは大久保不承知に付不

被行旨是亦大着眼の次第も可有之候間此上強る申義には無之候得共かね
る出入之人々出頭にも各極一分にも朝憲の立不立の大事只此時と窃に存
居候折から中御門様等彼是御憤發之趣幸に御扶助候は、如何乍併私申上
候事實に御奏にも又薩論杯に相成候は大道之大道たる所失し要務に差
支候に付^(不明)論には決る無之趣誓約候は、何之子細も無之哉兩卿他泄之難
は有間敷何卒々々兄弟遠武限りに深く御計り給間敷哉折角の大事既に
九分迄に至り候處此兩條にも段々遺憾之件々不少候

一便宜申入候正三卿若し御面談候は、誠に御申入不相成候哉○先達る貴
藩建言之砌庶堂之評論尤宜敷候得とも右か御奉公の終りとか最早所詮と
被捨切籠居之様子に風聞是何等之事にや右二三之語にも漸々正義之色發
露と申位之處右限りに所謂港川底意か何ぞ數年の長き姦賊と立並て當
役勤仕在之候哉抑頼朝以前之復古大政取捨に關係候朝廷の大事又不可見
大機會今を失ふて何をか他にも求候にや只一死報國は今三五十日之處哉

愚見にも朝廷即時の處彼卿無之は不相叶事と存候に付若に井上士出頭
候は、何卒々々御辨解被下間敷哉如何之申條恐怖候へとも懇意にまかせ
不惡くく

探索一説

一橋心中

大權取んと欲して捨るの深謀

王權を立てるを名として幕權復せんとする也其故

關尹野廣會の心中を能計り幕斃るればこの奸徒の斃るゝも自らの勢成を
洞察し己れは表判然大權を辭し裏 叡慮にして二尹始め推而任せさせし
むるならん尙 朝命を以列藩召を申立是又二尹等をして幕命にも召さし
むるの策全幕命ならば召に應せぬを計るならんか猶豫日を経る中陰計百
出あるべからん但嶽嶽二雄の大援を得候よりのからくりならん今 朝廷
因循にもは終に橋嶽に愚弄せられなん

右眞僞元々識見不届事に候得とも橋ヶ程迄には有間敷哉如何只可恐可慮は嶽心中候此人英雄也若し表裏以て補幕に於ては大懸念之事に付朝廷に亦深く御思慮被爲在存候元より漫りに人を不可疑狐疑より誤事古今例不少候得とも所謂深く計つて淺く渡りたらんはよしと此事承度事と存候愚差出候に付萬事一應御ゆ示可給候以上

尙々大卿方は其上はよろしく候これ一昨夜粗中御門と同意に相成多分奏陳列參と存候

七六 千種有文書翰岩倉具視宛 慶應二年八月廿四日

昨日は御細示畏拜見候彌御清安令賀候然は御深切御示條々畏入存候殊に三通拜見畏入存候實は過日來悴にも今城奥方薨去に付引籠居頓と外出不仕夫故一入何事も不承事にて別て御示之條々御懇切拜承候事に候富月三日戦争云々之事拜承候別段承候事無之候猶又承候義も候は、可申

上候

大樹公にも彌他界哉之様に傳承候一橋歸京更に下坂明日香井歸京之様に承及候會も一昨朝比下坂と承候何分此度は無相違哉扱々氣毒々存候嘸々和宮にも御嘆と奉恐察候奥向の内々承候處大樹上洛中和宮御方大御心配にて何卒早く御無難御歸城之様日々御庭御千度被遊候和宮御待被遊候旨實々に相伺候扱々恐入候事にて彌此度は御愁傷と存上候事に候就て養子之事如仰一橋に候得は一同人望も可宜と存候得共余程嚴敷叙命にても無之は中々一通や二通にては御受は被申間敷存候其上は弟矢八良丸にても被任是迄通り一橋後見にても可宜哉何分左候共幕府方中の一途には承知も致間敷哉何卒今度こそ格別に爲一天下治り付候處從禁中御世話爲在度關白にも盡力之様專一存候得共何分因循之方如何可有之哉實に御案申掛候へは扱々恐入候御時節にて全體一人として諫言申上候人も無之哉殘念之事に候尤長征之義も仰之通兎角幕軍敗勝

是と申も何分兎角人心不歸和之戰爭故幕敗北も天也地也かと被存候就ては幕之事計り惡敷申成し候のみならず只々天子之義も彼是誹謗候事扱々恐入候事に候何分ケ様之御時節に至候は逆も今一段行所迄不行候ては治り付かたく哉扱々困入候物に候會藩へ忤議論之事は御尤々存候然る處亡父以來歌道弟子之者國元俄に用向被申付去十二日出立歸國候扱々殘心々存候扱又段々御深切々老母孝養之事歸宅之義示給扱々畏入々存候尤先達來會公用人盡力陽公へ申上候得共何分々先日申上候通種々御疑惑有之御氷解無之由是と申も全く裏印讒故之義と存候夫に無相違尤裏印之惡言御咄も出有之候由に候如此迄裏印御氣に入彼朝臣申上候事は惣て御採用故逆も々々今暫時到來候迄は叶不申と存候て孝養も打捨歸宅絶念候事に候最早此上は無致方次第に候右次第故決て々一人歸宅なと候ては彼朝臣など如何計之惡計被致候哉も難計故何分々無詮方絶念々候尤會公用人も今暫氣をぬき不申上ては却て爲不宜旨申居候實々

會藩には誠に々懇切々取持吳候得共どうも々前文次第實に未運之不來處と悲嘆々之至に候吳々毎々御懇切々畏入々存候且又薩人數來候事も承及是も如何之事哉と實否如何と存居候處御示給扱々畏入候彌實事と存候建言差出候由是は頓と不承候得共猶又何ぞ承候は、早々可申上候廿六日忤來候間又々何ぞ實事らしき咄も有之候は、可申上候吳々御細示畏入々存候御返事迄如此候也

廿四日

昨晝後御答可申上存候處晝後夕迄來人有之認候間無之及今日宜々御斷申上候也

尊君には御見込之邊斷然と要路方々御建言も被遊度頻に思召付之事實々御尤々誠感心々仕候不容易御勘考之事扱々おしき々事にて何卒々御採用に相成候得は誠以公武共に恐悅之事なから實に實に兎角々毎々申上候通國事要路方々并殿下兩役心不打合故逆も々

何申出し候ても中々御採用にも不相成哉扱へ恐入へ候事に有之候
併吳々折角へ御勘考は實へ御忠實之事難默止程能御勘考出来候へ
は扱へ恐悦之事に候ほんまにへついせうはのけにして尊公之御良
策之様に候は實以誰にえこひいき無之御正論にて治り付可申は必定
に候扱へ殘念へ之事に存候

まさやま様

内々御返事

かづ

七七 井上長秋書翰 [岩倉具視宛] 慶應二年八月廿四日

拜答必用而已奉申上候

- 一 昨日は遠武參上之趣何そ遮る不奉伺候不叶譯有ての事歎と奉存候
高崎左京にも兼る拜謁奉願居申候間乍恐御含置可被下候
- 一 正三卿の申上込事件如命斷然すめられ且後患被引受邊何とも難申上

候得共今日參向精々盡力仕度奉存候勿論群伯御召の上は譬へ一端御叱
り邊の事有之候共後患の氣遣ひ有之間敷と存候

一 大原卿は未だ拜顔不仕候得は此節之事に付新に申上込は宮の差支候
譯も有之甚難事と奉存候乍然何と歎勘考仕度奉存候

一 二公之所誠實之御方には相違無之候得は何も害に相成程之事有之間敷
返すへ可惜事と奉存候櫻木公内覽 宣下と歎申邊にて今なりに相濟
候は無此上次第と奉存候乍恐此段再往奉申上候

二公家來一兩輩之所は如何
にも除き度ものと奉存候

一 兵庫開港内約一條に付るは遠大之御深慮難有奉承伏候

右直諫之事おのつから列藩集議之上は可被行機會も可有之候得共其
内思召立之處 朝廷上之美事と恐悦至極奉存候謹言

八月廿四日

長秋

七八 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年九月一日

北山 大人

和愚老

内

拜見候過日來段々御配慮種々御教諭全御蔭に於昨夜大都合に至り先々諫奏之詮も有之大に、畏入存候併十分之事には無之候得共實情之説に於關尹御引に可相成關は一兩日之内御辭職に可相成候何れ間止とは存候へ共何分諫奏に於引時節到來と御怪之事に候間眞實御引可然旨別段小子實意も申上御承知に候間先相違無之事と存候尹も同様之様子に被察候間是も僞には無之と存候右に於人氣も相直り候事は大に、悦入候事に候何分微力十分には不至殘心之事に候且又、之處も承候昨夜も申合置候得共猶明朝今一度申合度と存居候處に候間御示し之旨差心得又々可申合候去月廿八日國事之節幽閉被免候議論有之其節二公御申上之事何か御意に不被爲叶義有之例之御いちと存候明日大卿被申上候は、多分其に於宣下と

被存候廿八日之事は極内々昨夜に承候事に候無程一寸昨夜之次第申上段々御教示御禮も可申上申居候處御使別段不申入乍略義内密に申上候何れ不日參上と存候へ共一兩日は難參上義有之御斷申上置候委細は拜上可申述候諸藩召御許容大幸之事に候昨日世上一體に風聞有之大に心氣も可立直様子に承り實に畏候事に候全御配慮之切は深感佩候先御受迄早々以上

九月一日

二白正三心中可惡至に候尙拜上可申述候也

七九 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年九月二日

對 先生 内啓

和 老

口述

一今朝千々承候徳中征夷職辭退且後來失墜悔悟に付大に違變會不一方勵勤之次第只今に至出拔かれ候次第に於甚氣毒之義何卒守護職被免程克

御申諭被下候事二公へ申入候處尤其通り實にうられたる也と御申實に氣毒之次第乍去職は幕か申付候義故被免候と申にも御取計難成何れ二公兩三日之中御辭職に候間左候は、同罪之義彼も辭職可致思召候其節は御暇賜厚 仰聞賜物等有之彼之氣の不立様申入候義可然旨御申一向外之義は無之様子に候且又諸藩召は四日五日比に御決定可相成旨に候尤無相違召候方に御取計之様に御沙汰候

一尹一向御引之様子無之困入候事に候へとも過日二公御申合何れ國事一定御辭退に可相成旨に候御引之處も精々穩便に御應對御出仕無之様御取計可有之旨に候右逐々申入候事

一今日大卿參内如何と存候昨日か大心痛申候様子に候事

九 二

八〇 井上長秋書翰

岩倉具視宛

慶應二年九月四日

尙御兩卿御狀并に返上仕候

御細書難有拭見仕候

一卅日之砌會邸に於て少しは動搖可致之處中々閑靜之趣不審不少候得共江州朽木之邊は虚説歟と奉存候又領内人足金米云々の一條も深く可疑譯も有之間敷兼其位之事は有之筈と奉存候中卿を言上之砌御咄之趣は二公御一人思召に可有之何分其御議論通には參り兼候半と奉存候會主人下問群臣議論之趣何も承り候事有之候得共如命左も可有之事と奉存候

一尹宮の會を御附之人々御暇爲致説も有之未だ體には承得不申候得共不審之至に御座候爰に至て會も不可頼物と後悔仕事歟左候得は彌會も論するに足らざる事と奉存候

一幽閉堂上戌亥邊之事委細承知仕候宮思召も可有之何分相含精々盡力仕度奉存候私も昨日か伏水の差越罷在大に拜答遅延に相及び奉恐入候尙

變事有之候は、早速可奉言上候誠恐敬白

九月四日

長 秋

前 中將様

尊閣下

追啓大公二日之御盡力細事伺度候得共いまた承得不申如何之御事歟
と奉存候此節中大二公其外御精忠之程實に以難有彌此以後御成功之
段奉仰願候

八一 井上長秋書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年九月五日

尙長の方勝阿波守〔阿波守〕の説を以て引拂候趣承申し大樹他界と申邊に義
理を立一端承伏も可致事と相見得申候

御書難有拜見仕候

一會意底如命なれば大幸と奉存候

一幽閉之事宮にも精々御盡力之事候得共六ヶ敷譯も有之候由何れ十分之

事は諸侯會議之上ならては難成事歟甚残念之至奉存候〔櫻木公へ程能御内
話の思召も有之候〕

一二日大公御都合扱々難有乍恐不堪欣喜之次第と奉存候

一殿尹御辭職之事諸太夫が昨夜宮御方〔吹聴申参り候何れ殿下にも一同
被免兩三日を経て速に御復職其内櫻木公内覽邊之事に可然旨宮御内
話も有之候〕

一尹宮御家來伊丹類に諫言申上候由此節之事高崎井上周旋と申事有之候
由是は兼而兩人嫌れ者に御座候故裏辻邊〔入説歟と推察仕候朔日も裏
尹宮の長座之由候〕

一群伯御召之事何分速に不發しては萬事遅引に可相成是のみ宮も御心痛
先刻も原に申參殿口上群伯御召之事徳中〔言上に付云々又群議一決之
上徳中を以言上と申邊歟の含と相見得候旨承申候誠に褊小なる私心右
は先日來二公へ申上有之趣同様之事と相見得申候〕

一 德中明日上京是は兼前將軍送り出し次第上京と決着之由承居申候故別段之譯にも有之間敷乍然上京之上列參之堂上へ直談等願出候も難計兼御評決相成居可然儀と乍恐奉存候

右之外別段相替候譯も御座候は、追可言上候誠恐敬白

九月五日

長 秋

八二 中御門經之書翰

岩倉具視宛 慶應二年九月六日

北 山 翁

和 愚 老

机下内啓

口述

一 昨日は種々申伺畏入候扱御噂候水口藩細川已下之内兩三人面會之事大卿へ申談候處明七日朝差支無之候間何卒明日辰半頃愚亭へ可參様宜御通達願入候彼是御配慮御蔭に已後安心形勢承知可仕と畏入候尙宜願

入候

一 二公尹宮共一昨日辭退二公は直に召止極内々久世御使に段々被下候へ共御固辭之旨尹は被止于御前之旨に候極内々御合願入候
一 櫻木公之事大卿同心明日晝後可行向候今日大卿參内の事に候
一 昨日又々北小路の會中に長一件急御所置無之候は不容易義相發候哉難計早々御所置之様可周旋旨被申越候元來諸藩召は右長一件に付被召候事に候處右上京直に長件御所置彼是と申候義は如何之事哉甚以不審之事に候北小路全被威候事と存候何者々様に申入候哉不容易とは何事に候哉今日可及尋問と存候實に困入候事に候何卒昨日内々申入候野間事早々御調御取除急要と存候彼兩士に被先候無念何事起候積りと相見候扱々悪き者に候何も宜願入置候譯之處も宜御勘考願入置候箇様に被威候説を被申越候は彼撫禦術大に苦心之事に候
一 諸藩人撰別紙之通徳中へ申越候趣大卿被示候間御心得迄に入見參候右

人體召寄候處は随分正義論と相見候歟如何尙彼亭中如何哉御探索宜願入候事

先荒々申入候尙又宜願上候也

九 六

八三 千種有任書翰岩倉具視宛 慶應二年九月八日

豊を勘考にも先野間を勘考無之は後害と存候いかなる義を觸候も難計候何分豊は方付ずは御不爲と存候先は愚存如此候先必々御秘々早々火中希上候也

彌御安泰恐悅存候抑一昨日は駿州を以巨細之御示諭敬承仕候扱幽閉之處は追々殘懷之至に候既門流を以三ヶ度幽閉被免之事兩度は御尤に被思候へ共壬戌之度之義存意可申上之旨御尋誠に以存もよらぬ御事 上には能々御承知も被爲在候而爲讒人箇様に嚴重被仰下候は實以御不仁之

御次第殊に是迄有任へは御内々種々厚御沙汰も有之今更爲讒人箇様に一廉御付被遊候而は甚以御恨申上候其爲に大原を被召聞食候は、御分りも可被在之處右様に嚴重之御沙汰何共遺恨千萬之事に候是全内奸大輔外奸尹等之計策に無相違誠に以切齒無止間候何分早く内奸を遠さけすば日月明正之期無之最早忠も孝も不立傍觀之外無之と決心候全體是迄御内儀を惑亂さし無罪之宮女隱居幽閉さし

叡念を感し晝夜無絶間惱

宸襟剩如此度は讒を入候哉誠牛ざきにしてもあきたらぬ者と存し候實に一日も差置かたき者に候誰か是を退け奉安宸襟哉と長息無限最早赤心之寸忠出し候も是迄に候彼ある限りは何事も御捨可被遊様存候併若心ある者あらば先第一に野間次に豊左候へは一年服に退出可有之而再出仕を止め候様致し度左候へは惣方へ響急度御目覺明正之時可有之存候若此度初度之分は被殘跡兩度被免候は、實に世上に面皮も無之急度非常

之決極仕候尤兩度丈被免候は、豐隨杯いかなる尾をふりいかなる奸曲めぐらし尹へ取入杯仕候へは日月地に陥入再照無之候へは初度之分は生涯日月を被爲拜候事無之何分今姐已を誅無之はいかなる御良策とても難被行候豐隨出仕に候は、大患必生し候是を誅する者天下第一之忠功と存候愚昧有任此外念無之候大原中卿共に壬戌之幽閉被免候事そこ意無之共に讒を尤と一期存候歟と存候○西四辻段々周旋候處昨夕に至り行いかんとも致様無之猶々勤考候先は右申上候早々頓首

九月八日

殊により候は、今晚拜面相願候哉も難計候

右種々失敬而已申上何共恐縮候只々腹立候より種々書つらね失敬吳々も被免候今晚拜面と認候へ共先見合申候乍去野間次に豐隨是は是非御勤考有之度豐隨其儘にて大輔段々奸曲増長に候は、終には御惱を引出し候事必定候兩士等極密に勤考有度候皇國之御爲に候は、有任か相

(子遠は千種有任)

頼度位之事に候尤露顯候有任之名出いか體之御嚴重を蒙り候も不苦候

友山公

子遠

八四 井上長秋書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年九月十二日

奉拜復

一中公御書奉返上候これに付何も御嫌疑有へき筈無之と奉存候○過日參殿之砌御含めの事も別段承り不申昨夜浪士七人裏辻殿内は發砲狼藉之段は有之候定而御聞及も有之筈と奉存候投書之趣も相見得申候折節中將殿當番留主に而退出も出來かね大恐懼之由承申候
一德中より關尹御復職之事申建相成候得共諸侯集會迄は何事も國事御沙汰無之模様奉伺候間是も同様歟と奉存候
一細川良之助上京譯は委曲存不申候得共德中説得之事と承申候

右奉言上候誠恐敬白

九月十二日

長 秋

上

八五 千種有任書翰「岩倉具視宛」慶應二年九月十四日

彌御機嫌克被爲渡恐悅奉畏候御内一同無異御安慮可被遊候扱從來段々苦心仕候御幽閉開之義過日は不計人心打合三幽閉被免候處も言上に相成御採用之節は忠孝共に從來之途懇願候義と深く歡喜相樂居候處彼是と相變甚以心痛仕候折柄門流く沙汰にて陽明九條桃花鷹司は御調同斷去十一日一條家が被召年壬戌也圓心公以下幽閉被免之義御子細被爲在相願間敷且猶申上度義は御内慮相伺候上令言上候様御沙汰に候陽明も同様には則内府公被仰渡候旨陽明公初めには高野三位櫛笥一番に參被召候る右様御沙汰に相成猶所存可有之哉右様之義向後言上には其方身退にも可相拘無據

門流をも除き不申ては不相成と嚴命之由高野初め大恐懼之由承候御請書之寫別昏入御覽候一條殿門流は又々大原杯と示談仕右様御沙汰には言路御塞之御次第故別昏之通猶又差上置候全體右様之次第には二度之幽閉被免之願は尤に被思召初度之分は更一節御附に相成甚以殘懷之事に候殊陽明公右様に嚴命有之候には全く内府公之所意に候由承候左候へば當春内々友山に藤井之咄振とは大相違之義兼々承候に内公には思召も無之哉に候處此度は惣内公所意と申邊甚以不審千萬之事に候毎々申上候通從來祖母公御苦心被遊殊に追々御老屈日夜御悲泣被爲有御側に伺居候は誠以難堪次第御至情之邊御尤誠以恐縮仕共に涕泣仕候是迄段々祈願も仕且種々之嫌疑も不相構人々之そしりも不厭茲迄粉骨仕何卒御歸洛丈成共被免候様と周旋仕候處不計此度之機會人心打寄途大孝も候義と相樂候詮も無之一際嚴格に相成悲泣に不絶候若兩度は被免初度之分は不被免剩向後は歎願も不相叶終には御開閉之期も無之と存候へは誠に以遺憾無限

打伏悲泣仕候此上は廿二人之同志之者にも面皮無之勤番之衆人にも如何面を合し候哉實に指さしれ顔をなかめられ候事と誠に残念至極此末祖母公にもいかし仕候を奉慰候哉と殊更心配仕候何卒右至情之邊を以友山公今一應藤井へ懇談被吳陽明公は右大人之良考を以偏取持之邊相成間敷者哉友山公内々藤井面會に右等之至情被申吳候は亦々萬々一も御氷解に相成壬戌之度御開閉相成候は是に増之幸無之何卒憐察盡力之様御内々御頼込奉願上候誠にク様之義申上候へは定る御心配之上之御辛苦を相増候段誠に以重罪深く奉恐懼候へ共最早外々に良計も無之又岩友へ之言路も無之不願御心配言上仕試候萬々一成就仕候へは御前にも御孝道御貫通之義何分にも宜く奉願上候實之苦辛之余り右愚存申上候何分御勸考御通達之程伏る奉懇願候早々如此候誠惶誠恐謹言

九月十四日

有 任

言 上

八六 井上大和書翰岩倉具視宛 慶應二年九月廿三日

拜 答

昨日は御書被下難有拜誦仕候中公は御寛談更に被仰聞事件も被爲在候間夫迄は參殿仕に不及旨御念被爲入御事恐入奉存候眞實御合體弊藩都合等之事被仰談可相成御模様之段重疊難有多幸無此上奉存候此旨拜答且御禮奉申上度乍恐呈書仕候敬白

九月廿三日

中公御内命に御招被下候は、大久保愚兄亦是重役之者に差支無御座候

岩倉前中將様

井 上 大 和

御近習中

八七 岩倉具視書翰井上石見宛 慶應二年九月廿七日

岩倉具視關係文書第三 (慶應二年九月)

二百五

秋冷の砌先以て御壯健欣然候別紙一帖愚策足下限り披見御教示の程偏希望致候就ては御頼談申度儀有之他事にて無之先月列參之件に付小子再出仕を企望の爲め姦計を施し公卿を煽動致候杯との流言有之内府公御信用にや壬戌の幽閉四人は頻に御排斥之由傳聞致候内府公邊に亦猶今日に至るも斯く姦物と御着眼に亦は足下兄弟に亦如何程周旋盡力被致吳候亦も復飾出仕は逆も不被行儀と存候亦貴藩邸中の邊も如何可有之哉と存候先年の事件御不審之廉々今更御糺問と申場合にも立至る間敷百計盡果小子が微運之所令然に亦不言に附するに如かずと觀念候得共入洛丈け御宥免は何國迄も周旋盡力に預り申度小子宿望之旨意少く申述度聞うかる可くと存候へ共一讀頼入候扱小子愚意之存する所赤面も顧みず隔意無く吐露致候種々失敬之辭は申迄もなく嫌疑之廉々も不少候得共偏に不惡承引頼入候扱小子愚意之存する所赤面幽閉勅免を蒙り廟堂に出入し乍不才無學大政に參預し一生之力を盡し忠誠を抽て、輔翼仕候は、中興の鴻業成就

す可きは此時に可有之と一途に思込候斯る世に男子と生れてこそ御奉公可致の詮は有之と先年以來立志之義況んや今日に至ては猶更彌以勉強忠魂を磨く可き時節到來と朝昏片時も思念に所不離候依之廣く列藩之形狀を通觀して獨り熟思するに中興の鴻業を輔翼し能く成功を可奏ものは誰に可有之歟と言はゞ其人は必らず隅州なるべし其臣隸亦豪傑雄才多し是を以て小子深く隅州を渴仰し厚く結約して籌圖を計議し與に共に臣節を盡さんと欲す是れ眞に小子之志願に候壬戌の夏隅州登京之始小子獨り諸卿に先ち周旋奔走し大原卿勅使として東下三事策施行之儀は徳川開府以來未曾有之大事件皆是隅州勤王之方三國之武威所令候然も小子も亦與りて微力なきに非らざる歟其後は奸名を受け屏居致候得共甲子の頃貴藩は世舉て奸賊と呼と雖小子は敢て之を信用不致初念貫通を專要と致し強て令兄藤井殿に洛北迄出馬を乞候亦心肝を吐露し時勢を評論し候より今日迄數十回往復致候次第は畢竟小子貴藩に倚頼して中興の鴻業を籌圖せん

と欲する外更に他念無之候處悲哉内府公之御無情令兄藤井殿も未だ御疑念全く氷解無之哉にも愚察致候況や大久保氏始め如何に可有之哉何共慨歎至極終身之遺憾と存候憐察可給候良禽は樹擇で栖み良士は主を擇で仕ふと申す古言も有之豊太閤の猶微賤の時に於て當世之豪傑武田上杉今川諸氏を顧みずして未だ大國を領せざる織田氏に仕ふる如きは小子尤感服する所に有之候也小子之貴藩に倚頼するも亦此意に外ならず候足下之近信に依れば山階宮密々御對面之御沙汰も有之高崎士來談之儀被申越此兩條は小生感悅無限生前之面目不過之候就るは折入り及懇談候儀は小子事貴藩に於て到底容れられざる次第に候はゞ其邊腹藏なく有體のまゝ御洩の事伏て頼入候右は決して別意あるに非ずその模様により一心決定終身の覺悟をなし禪門に歸するか又は風月を樂むとか早くその志を定め申度何の目的もなく國事を憂慮するのみにては世に寸益なく空論を吐て一生を終らんは至愚の極と存候將又朝議一新し諸卿幽閉勅免あるの日に於て

小子等の徒猶依然として舊の如くならんには獻毒呪詛の讒誣も終に實事の如く相成り如何程に鐵面たるも何人の顔ありて再び世人に見ることを得べき哉あゝ人生僅に五十年禍福は素綯の如し亦如何ともすること能はず候小子心中深く憐察の有之候てくれぐれも貴藩の模様有體の儘内々御聞かせ給はるべく候却つて觀念を決定し一身を安んずる所に有之候聊も斟酌なく垂示給はるべくこれ希候さて此一帖は小子若し恩命を蒙り再度出仕の大幸に遭遇せば足下兄弟大久保西郷兩士と面會可否を討論し教諭を受け申すべくも兼ねて思慮いたし書試み密事の件々に候さりながら眞に草稿のまゝにて讀兼候所もこれあるべく候へども最早練磨致すべき氣力もこれなくさて此儘火中に投するも聊か殘心にこれあり候間足下限一讀を請ひ若し一事にても採用の廉これあり候はゞ本懐の事に候定而空言不可行之方略と可被見取と存候得共小子は實地に被行度見込に有之候乍併淺愚の辯論抱腹而已と存候早々以上

九月廿七日

對 岳

硯 大 人

机下

八八 岩倉具視書翰案

慶應二年九月

昨夕三四郎に返事の様何もく承り、采女云々の事もよく分り
忝候扱そもし風のよしすこし念入候方との事いかと案し候得とも増大
夫々細しく申こし安心いたし、併不揃の時こふ何とそ無利せぬ様に
とふそく用心の様祈り、侍大出仕邊の事昨今はやめ今三十日
前後にはかならず分り候よしにて、あしき方にてはなしとの事也そ
もし來り候事いつれ十二三日のちの事と存候更に申遣し、夫迄は
安心の様に存り、用計りめて度かしく

八九 岩倉具視書翰案

慶應二年九月頃

忝り、御禮の事頼り、別々に返事申入す候方領の事滞りなく相濟安
心のよし御申入頼候まき山事色々多きよし極も所勞のよし致し方もな
くいそき候用事は此方にてつもり致候ま、もはや來るに及はす候當村秋
にて人もてきす候ま、今度の所は必無利にくる事無用いつれ又、申入
候事も候へはそのせつ來候てよろしくかます五疋たしのかに
右早々めて度かしく

度々申入候通り實にさりかたき用事候へとも無據延行の所今日尙さし
つかへ候てはととも、らち明申さす今日外、へ頼候ま、そへて用
事なく候來るに及はす候かしく千代から頼の文は明日下書遣候ま、そ
の通り認め遣し候へはよろしく候

九〇 岩倉具視書翰案

慶應二年九月頃

昨日文の様忝りにくまつく御兩家知様とも御機嫌よく新春に移らせられめて度忝候そもしにも無事勤仕めて度存候細しく返事のやう何くも忝候扱内々に候得とも侍大出仕邊の事色々心配中御門内談の事に候又く大夫に聞候様存候小子も此度は案外くの御事にてもはや世の中の事をわか身の事も是を限りにてしんのきた山農夫か樵夫かと決心の事に候左候へは實は心の中誠にくやすく存候事に候へとも中卿がすこしく色々申うされ候據なくかれ是の事にてそのうち入來細しく咄し申入候事にて候めて度かしく

九一 武内信太郎中村源之助書翰

岩倉具視宛 慶應二年十月朔日

頓首再拜謹奉啓仕候時下冷氣相催候處尊體萬福奉恭祝候 小生共無事消光罷在候間乍恐縮御放慮被成下候様奉仰望候陳は毎々之御懇情奉蒙誠

感誠荷不容易奉恭謝候其後如何之御模様被爲在候哉日夜心頭に相懸り候得共遠路懸隔御疎濶打過不本意千萬失敬仕候實は尾三糾合之策も難整申候尾も俗吏勢盛に正誠力微にして嫌疑も嚴敷一泊も六ヶ敷位之譯合に付殆迷惑之仕合に御座候

皇天未滅正氣幸に尾州知田郡東三屋村人にて富田九郎と申者に出會同人は素々知己之者に付則同人宅へ潜居相頼候處心能引受くれ去月廿一日同人宅へ参り候然處同人は貧生之義に家政も六ヶ敷其上今日上京發途仕候に付留守中へ潜居に不都合之譯合も有之候何れ尾三濃之間に都合宜敷場所も有之可申様相心得追々探索中に付數日之内には必轉移之合に御座候しかし列藩之上京之模様も略其内には相分り可申奉存候間今日か三十日程も立ち候は是非嫌疑も相ゆるみ可申奉存候付上京仕候合に御座候若上國中異事御座候は乍恐早々御報知被成下候様奉願候御書翰等被下遣候は

三州碧海郡下重原村

竹内林右衛門

一名一郎

と申人山中靜逸朋友に付靜逸は御托し被下早々相届候様被仰候は、速に相達し可申候尾へ御遣し被下候も達し不申候此段御承知被成下候様仕度奉願候

一 尾老上京之模様承り合候處徳中申立之趣に付諸藩召し徳中に就る傳奏等之義甚不服之由夫に付中々上京之模様は更に無之候何れ列藩上京も有之候は、そろ／＼と出懸け可申や之由御座候玄同老は中々江府に而盛に周旋致居候様子承候
僕等進退之義は委曲入谷氏御承知被成下候様奉願上候先は爲差用向も無之候付奉期後鴻候頓首再拜謹言

十月朔日

森 源三郎事

武内信太郎

田中精之助事

中村源之助

對 岳 閣 下

侍御史

二白御嫌疑は如何御座候哉甚懸念仕居候得共不任本意失敬仕打過候何れ不遠御伺可仕縷々奉陳述候何分爲天下御愛護被成下候様專奉萬禱候
謹白

九二 坂木靜衛書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年十月二日

謹啓

朝夕は秋冷益相募候處益御壯榮被爲在萬々奉恐悅候
一徳中事久世様飛鳥井様御周旋に而去月廿六日に除服被命候此事は已に

（坂木靜衛は道別河の人）

十六日頃迄に原市之進等專盡力に於一時陽明様等之御盡力にて被防居候處終に志を得候主謀は殿下様を出候歟或は兩卿を出候歟未詳然るに今以參朝不仕候は全く前將軍同様之御取扱と申事を遂候策に可有之候其上にて參朝之見なるへし

一列藩上京之處と先日申上候 阿世子登り藤堂は一族之者登候宇和島は既に旅館等も北野にて求候不遠登るべし薩之處は岩下某下り候後今に國許の一便も無之上京之遲速更に不相分候得共何れ薩人之説には今般上京大決志にて登る事故内外之所置等を附候而登る事故少々は延引すべしと云しかし兼而輦下に事あらは火船を以注進し即刻馳登んと云し事とは些し違へりともかくも上京之速ならざるは勤 王之力も同様之事には出申間敷哉其内には幕方にては益力を盡し内の處を固め可申候間列藩上京之不速は大に不見識歟是を押せば上京之上の周旋も如何にも不安心に候彌分裂之勢に不至は 回復は可難計亂臣賊子之着目に陷

候歟可歎可笑

- 一春岳歸國之事未承候速に探索之上可申候是は大事々々
- 一東國邊究民蜂起盛なるよし未得其實
- 一山名を本國の探索は彌嚴なるよし
- 一御懇書拜誦御命之趣何分奉恐入候しかし國家之爲分相應に可奉盡候余は後便可奉言上候頓首謹言

十月二日

九三 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年十月六日

略答御免

大久昨日入來委細申談候處大卿左大一件大に驚入候事併誓約他言無之邊差合一兩日之内參り何となく其邊之咄に相成候様計策を廻らし向後左様之義不被遊様得と説得可致旨請合に候誓約之邊は吳々承知に候間何も宜

頼旨申入置候又全體之義も至極都合克受合諸藩上京之上は 朝廷邊盡力
は是非小子等へ可相頼心得に候間只今之處心得に相成候義は決る無服藏
可申入隔意等は決るく無之心底を盡可相助旨返答に候間大にくく
く安心に候事に候尙又宜願入候事

一除服宣下は御示之通之旨内公には頓御承知無之旨申居候將軍

宣下之事大に案居候若彌右様之義に候は、早々爲知吳候様申入置候其
節は廿二人は勿論成丈人數相催大に拒候心得申入候處大に難有旨申居
候事に候決る歎息候得其其上は致し方なきとの様子は更に無之右様之
義出來候は、天下之事も大に去候哉と實に苦心之趣に相聞候左思召可
給候

一隅州上京之事一向不相分旨に候兩三日には便可有之旨申居候何れ當月
中には上京哉と申居候間何卒一日も早く上京祈所に候と申置候事に候
一過日申願置候時情明識之者之事扱々畏入存候尙宜願置候先差支無之候

は、八〇別莊へ可參心得に候へは此比之義頓不相分候

一大久昨日暮々愚亭へ參り候一寸申上置候又々何時入來哉も難計旨且
又用事有之候は、何時成共可來間無遠慮可申入申居候

一扱又陽公にも 閑暇には可出勤何か御相談も被成度旨段々御沙汰に付
兩三日之内可出勤旨申居候間其は、重疊之事猶宜内公補佐之事頼
入置候右に付小子にも内公へ折々參り議論頼度旨申居候間左様之義に
も候は、得閑暇次第可伺申入置候委細は拜上可申述候へ共荒々爲御心
得申入置候事

此外談話數條有之候へ共難書取尙拜上と申殘候何分是迄に成候義忠魂貫
通祈所候宜御教道願入置候也

十 六

和 老

北 翁

机下内啓

九四 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年十月十一日

御書面之趣何も令敬承候彼是御面働恐入候併御懇示深々畏入存候厚御禮申上候

一今日當り除服後參内可有之就るは前將軍同様御取扱且下乗場所等も如何と兩役中々回狀に付山宮内公御申合に於内公亭に於兩役被召集當節左様之義不可然諸藩上京迄は何事も無之方可然尤天下之爲 朝廷の御爲德氏の爲何事も暫無之方宜又右前將軍同様御取扱は止に於も一度參内致候後は最早參内止候義は相成間敷件に付今度之處何分爲こかしに於參 内を被止候御積り昨夜兩役被召得と御和解可有之旨大久入來申居候

一同上に付自然昨夜之御咄打合不申節は實に天下之大事廿二人奮發頼度旨極内尹入來咄に候間一旦參 内事情言上之上は天下之御大事と可相

成義に付傍觀致候義は有間敷義に候間成不成は天に致し盡力可致旨申入置候併兩公連座に於兩役の不然義得と御申聞し相成候は、屹度夫に於宜義と存候先只今に何之沙汰も無之何れ夕刻迄不沙汰候は、様子可尋遣と存候事

一櫻木公引出二公には御示し通り之件内々申入候處心配之段尤に存候旨乍去櫻木迎も引出六ヶ敷諸藩二三藩申合夫々爲引出候様可周旋旨申居候二公にも補翼宜候は、隨分可宜哉に申居候何分可然勘考頼入旨申入置候二公出仕迎と存候義も申入置候

一中前大已下之件得と申入候處實に角迄盡力周旋之事實に畏旨申述尙又夫迄屹度勘考可仕旨申居候併尙又小子にも可然周旋願度と申居候事に候

一戊年幽閉件御示之通り申入置候

一亥年同上 親〇六ヶ敷哉之時宜極密に心得申入候處深く畏旨實に心得

に相成畏旨大悦之様子に候

一 徳中上表に付取計方之事は尤未不申入候事

一 昨日右等之件々申入置候へ共貴君之事は未申入候又々折を見合可申入候是は遅方宜と存候

右極内々申入置候尙委細は拜上可申述候吳々御委敷御書取畏入存候也

十一

和老

對公

内言

九五 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年十月十三日

口演

過日申入候徳中參 内一件尋遣候處別紙之通り大久々申來り候間内々入御覽候

一 參内町中通行筋觸出し又々延引之旨に候不都合の事に候也

一 昨日十二日備前上京哉に承候又々差障り之事不申出は宜と存候事

一 昨日北小三品入來澤之事散々に被申居東武も同様又々野印離間説扱々困入候事に候是は勘考に不彼野間遠方へ退候様致さねは差支候事と存候乍去大久へは難申と存候間井上面會に不委細可談哉と存候併一兩日風邪平臥全快之上之事と存候十分彼卿信用に候間大に不邪魔に候澤も何か着込又は地利見分等も被致候由に被申居候是も實否取調得と分候は不心得違無之様説得肝要と存候事に候
右荒々申入候也

十月十三日

和老

北山大人

内々

九六 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年十月十四日

口上

備前伐長論上京哉之旨扱々如何兼備上京は不頼からと存候處左様之事にては實に紛々に可相成困候事に候何分次第可示給候過日酒井へも國論探索可申來申置候へ共其後は不來候事

一竹原未參申候事

一澤之事酒井へ尋候様御示何も承候左候は、先可相尋候其上に藤井大久之内可申入候事

一正三退役扱々如何と存候從來之忠志も一時に散候義且は速に被聞食候邊彼是疑念も可有之哉と大歎息之事に候去十二日被差出即日被聞食候由に候如何之事哉と實に長息之事に候也
右荒々御答申上候一兩日風邪平臥亂筆可被候也

十月十四日

和老

北大人

内言

九七 里見次郎書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年十月十四日

奉追啓候

過日鄙章相認脚便に差出可申心得候處は富田九郎寓舎主也上京可致都合に相成候付同人に相托し申度頼置候得共同人發途自然遲引致今日々々と被申居候右案外日數も相移り候尤早速進退筋可奉報知筈之處飛脚便に亦は機事相認候書面相托し候も無心元奉存候付富田へ相頼候次第御座候遲滞之段奉恐入候御垂憐被成下候様伏亦奉願候然處三尾間之人物にも追々相接し候處大分有志之徒も有之就中土田哲二杯申候者は小陳平と歎可申人物に亦奇計權謀に相長し候者も網羅仕置候何れ追々糾合之策は相行れ可申候乍去人材之乏敷には困り入候前書中には三十日前後に上京之覺

悟に申上置候得共何分糾合も迅速には全難成候付今少しは延日に可相成
相心得候此段御含み被成下候様仕度奉願上候昨今承候に藝侯父子は上京
薩隅州も追々上京二十一侯之内八侯は稱疾不朝と申由承り候都形勢盛
衰如何御座候哉爲差異事も有之間敷奉存候しかし徳中十七日將軍職宣下
之趣虚説に可有之様奉存候勿々頓首再拜

十月十四日

二狂生

對公閣下

侍史官

二白重々奉恐入候得共入谷子の本文之義御鳳聲被成下置候様奉仰望候
頓首

九八 坂本靜衛書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年十月十六日

兩度之御芳墨并竹原連名之御華翰拜領被仰付難有奉拜誦候日々之時雨益

御壯榮可被遊 御座奉恐悅候毎々御細翰之趣逐一拜服備前伐長論之よし
甚不審因て伊木家來原五百右衛門は昨年森知己人にて既に今般も同人悴
金吾と申者上京森を尋山科の書翰差越候て幸に在旅宿臣水之掛札と同斷
及面會候處情實不分明同家來之上小五郎是も森之知人當改名松本美之介
は周旋方之よしに委曲情實も可相辨と今朝同人旅宿の相尋面會仕候處
逆旅雜沓難及密話後刻同人山科の訪問之趣に付右之節相分り可申候西四
辻卿には備前と御回縁も被爲在候旨承候に付中公の參殿云々建言之上御
書翰頂戴之上西四卿の參上申上候處同藩井上仙太郎には御懇意之よしし
かし此度は上京は無之哉に存候間惠美要之進と申人を御招ならいかや之
人之旨申上候處何れにも程能盡力御説得可被遊旨且中公にも西四卿を格
別に御倚頼に可思召問萬段此上は御話談に可相成旨御傳言旁西公の申上
候處大に御感佩之御様子に候如何にも堂々御人物にて頼母布奉存候阿淡
は十八日頃に上京藝も同じ頃歟右三藩は申談之上上京周旋之よし然るに

備先登れは備に因て二藩之着眼も不着候間實に不容易事に候昨朝因藩門脇少造の罷越及面會候處同人は當然之説に候何れ備人にも篤と可及談話申居候是も一助に可相成紀之三吾には竹原今朝罷越候間當人より可申上候十日夜陽亭云々十一日原市山階宮に參り大に屈服と申説は承候得共又一昨日二公の出終日居候よし甚不審藝之在京人尹關の出伐長説を唱候よし是は國論とは異歟大越云々之御懇命是は竹原可申上候薩今以上京否哉不知之よし是は大に疑惑を生候定密使は有しに要路にも秘し候哉若秘し候ならば情實は不及聞候實に大掛念に候中公確乎と御決志之御様子實に奉感佩候全尊公之御苦心奉恐察候先日樹下云々御本殿にて御噂有之候間僕は北山にも折節は被爲召只々凡々之御話にて樹か心を被安候方可然兎角一旦心中を被知候人を疎しては害之階歟因て智辨を以前言を消候様之事都凡人に接る之要と申上置候間此段申上候玉松參殿之節は樹も同様可然歟頓首謹言

十月十六日

北山閣下

御近侍中

靜
再拜

九九 坂木靜衛書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年十月十六日

副啓奉言上候別啓認候後徳中參 朝之事件承知仕候如何之旨趣哉形は公子様方御承知故御直聞奉願候此上之處萬一宣下之場に可運哉今日之勢薩之上京は期もなく却る阿幕之藩登京にては始終宣下を御拒みて貫徹之處不知如何一概に公平之條理迎も不被行事に御力を被勞候は如何哉中公には御決志之様に奉伺候得共勢によつては臨機之御謀略も可有之何分薩藩之處は大に疑はしく奉存候旁今日之情實も相分候上は竹原私兩人之内參殿奉窺 尊慮候頓首謹言

十月十六日

(竹原秀太郎は北島秀朝なり)

一〇〇 竹原秀太郎書翰「岩倉具視宛」慶應二年十月十六日
謹拜言上仕候過日は參殿御懇情を蒙り奉拜謝候其節被仰聞候三浦一義今日面會議論も承り候得共決可頼人には無之様奉存候扱又當日慶喜參内之趣甚不審之事に御座候右件々旁拜謁之上言上仕度奉存候故參殿は不可御本殿迄御一信なし被下置候様奉願上候草々頓首拜

十月十六日

秀太郎拜

御近侍衆中

一〇一 岩倉具視書翰「井上石見宛」慶應二年十月十七日

十日御細答熟覽欣喜此事候早々可萬謝之處風邪平臥漸く昨今快方に赴候仕合心外失敬御宥免可給候如命向寒彌御堅固珍重候扱千朝臣及臣等之事件に付不顧前後種々底意に任六さと御談申候處内公山宮且大久士舍兄等

御内話之件云々來示にてかくせん候山宮の賢慮の所はかねて拜承の事候得共内公大久士等是迄之の事とは案に不計義にてやうやく感喜難盡紙上且は臣か微忠被爲知に至りしかと此條幸甚不可言一身に溢れ恐畏仕候最早萬申事なく候全く足下盡力之致す處高庇終世不可忘此上宜敷頼存候隅州登京之上一體之所云々頗感戴候既往不論の御着目にも候は、必爰に不出は不可有哉乍去癸亥の分君上の所眞實に如何可被爲在哉懸念不少候亦是は一身之事申も無益候得共壬戌件九公は頓に別種なかに久卿中卿正卿等以下臣等に至り大同小異にして凡て同様勤仕之事久卿獨り孤島俊寛に至ては朋友の義にをき信にをき難忍所にして於臣は苦慮の事に付兼て深く御熟慮懇祈之次第尙面上巨細可申入候
臣は先達て内公壬戌云々御沙汰之處貴藩邸論同斷哉に傳承より心神朦朧として歸する處を不知最早一世に寸功立るの期もなく終身樵夫たるへしと爰は決し候得共又此儘餘命を保て安然風月に終らん事實に忠孝共に不

立不如兔や有ん角有ん種々苦惱寸分の間も不安所十日報書真以大慶無量
之事候 勅使或は幕吏討論等之義にて公卿中一人死を以て報するの次第
候は、臣必自任して可勉勵候尤事業なくして如此申候間空論極り候へ共
決る不然此一言は誓書可致兼て存亡の次第も有之候間又々面上可申述候
御承知とは存候得共壬戌件に付公卿中は勿論有志中も七八分拒^絶の議論
にして當節に至候ては追々讒言行はれ候趣傳聞之砌深く御分辨頼入候但
大久士如此水解之上は臣愚見の始終窃に御語合給候は如何にや然し不
可然存慮も候は、決して必と申にては無之候尙又御人撰論別紙奥に申入候
通り不容易次第に候得は得と御熟慮之上大久士に御内談祈候臣餘り種々
さし出候様我ながら如何と存候程の事候得共今日之事實に重大事件と寢
食不安御爲筋存上候所は如此候凡て先足下賢考盡され吐露候様頼入候

極秘條々專要の着眼にも熟覽之趣大幸と存候過日來御認秘し中卿にも一

二言申入候而已追々は貴國へ計り可被行様祈念候
列參之事毎々過日之通は不可行云々之事元より只今何か更に所置と申に
は決る無之列參糾合衆あらば云々と往事策の儘申入候迄に候
櫻木公同斷なり但御説通り各登京之上の義に候夫上も如何可被爲在哉懸
念不少候是は殊に貴國の盡力に可有之か

宮攝家堂上 勅問上書之事可然來示に付早々極秘に奏上凡六分迄可被
行哉に至り候今四五日にて可相分候但云々被爲思召候に付宜敷様早々可
取計右府公山宮公有公御沙汰可相成右に至候は、必一應御遠馬の事か
ねて頼入迅速御苦勞頼存候

會之所意底何共難計元々無御如才存候得共宜敷間てうを可被用にや先年
貴國之藩士普く回國之上東國風談と云書を著されたり其中會津之義於武
は東國に冠たり然れとも寢首をかくと言様の所ありと書記在之候様存候
風と家來之咄し如何にも可思事と存候但右風談燒類候間何卒借用頼度

今日にては見合に可成廉も可有之と存候
去十日山宮内公等の御下知にて徳中參 朝廷引實に感泣之事にて有難と
はケ様の事と存候徳中井原梅澤杯右拜伏座視は不可有種々周旋可致被存候然
紀州の朝廷の建言を以てみれば拙策極り候か全く十計盡彼藩に命候事
と存候紀藩も安藤久下等威權を争ふ甚敷國亂と承候幸に幕方をして驅役致
候事と存候

天下經略するの大に出れば今細川一藩舉て勤王且薩は合し候は、萬々可
成候得共如何にも偏固不面白にや良ノ助才ありと雖不可頼人の由遺憾の
事候

因州一藩正好二端兎角混亂之由右にてや所勞と稱し上京なきよし也備前
は専ら徳中補助定論にて上京の處京都模様案外又徳中洋學によえる事の
甚敷には恐愕只々方角失し候形也併し先は勤幕と見るべからん尤かねて
阿州藝州上京三藩申合之上ならては何事も不申出由例の順慶たるへし片

時も早く貴國上京祈念候日々原梅澤を始め日々籠絡吾田へ引へし右の説
備 二家來密會話し

藝州上京余程後るゝとの事也

十月十七日

井上石見殿

具 視

一〇二 中御門經之書翰「岩倉具視宛」慶應二年十月十七日

寒冷追々増長も彌御安全奉賀候抑昨十六日徳中參 内一件實に案外之義
扱々長大息之事に候參 内之次第は別紙大久保を申越候通りに候又昨日
參 内模様は

一 於宜秋門外下輿

一 自車寄昇降

但昵近冷泉中納言堀新三山科内藏櫛笥中將飛中將伏少納言

右車寄迄出迎萬事如大將此事臨期參入候人々の廣橋を被示旨に候

一 休息所參入 殿上人倍膳

一 於小御所 御對面賜 天盃并於 御前 物賜之 殿上人行知陪膳

但御應接之義は無之速に御對面速に退出之旨に候

右愚息退出申居候事

右之通之次第に於は過日内々御咄合之柔言不用と存候實に歎息之外無之候ケ様に

歎慮斷然と被 仰出候様周旋は兩役に於は力不及歎矢張殿下内々御周旋歎又は豊又清水邊を御内儀へ持込候事歎兩役ならば廣久之所意と存候野宮は一昨夕出仕に候間廣久と存候過日飛鳥井家來も野廣久等之三軒は余程つかんだと申居候由に候間全彼等之周旋歎何分ケ様に内密之義相勤候ては實に 國體に關係仕難宥次第に存候篤と探索肝要と存候間大久の右一件申入置候又酒井も招置候間參り次第右之義申合候心得に候又正三辭

退は何か子細有之哉に番所邊風聞之旨愚息申居候間大卿を被尋吳候様可申入心得に候小子過日來風邪今以出仕難仕大に困入候事に候尤格別之義に於は無之少し之處に於困入候事に候右參 内惣を大樹同様殿上へ陪膳等之次第實に以歎息之至に候人心動搖如何と是又令心痛候吳く兩役心得無之義無是非事に候尙又賢慮之程伺度候油斷難仕義と存候先右之段申入度如此候別紙不及御返御火中願入候早々不乙

十月十七日

御一覽後御火中

北 岳 大 人

机下内啓

和 樂

一〇三 千種有文書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年十月廿日

御清榮恐悅候然は悴事過日來兩度六家へ行向候處折惡敷他行中に於不得

面會又昨日行向候由申越候昨日之次第今日可申越候間猶相分り次第早々可申上候

一備前上京仕居候右に付備前眞偽探索之事實は過日和歌入御覽候者此方へ出入候は無之尤伊佐方に居候つんぼの茶人か從來出入候事に其者か歌を到來候事に候右つんぼの茶人は中々役に立候者にては無之残念之事に候是か間に合候者に候は、實々大幸に伊木へは親敷至て伊木氣に入故誠に宜續に候へ共右仕合無致方候猶又俾へも得と申遣候事に候

一去十六日徳中參 内殊に攝家之列に御取扱有之候由昨夕俾申越候如何之御事哉右之次第にあらはまた誰か内々之方を周旋致居候者有之候哉扱々苦々敷事に有之候

一島津隅州は如何哉一向上京之噂無之扱々苦心之事に候何卒々早々上京候へは又々何か御宜次第も可有之哉々様に何事も延々に相成候

内には右徳中參内候様之事も出來終には將軍宣下にて有之候は實に々一天下之動亂上の御不明扱々歎入候事に候何ぞ隅州には異變にも無之事哉苦心候御様子御分り候は、御聞せ可給候様希上候

只今此所迄相認可申上と存候處へ御書中是々只今之御返事申上候前條申上候通徳中參朝之事大に々苦心此事に候如何相成候事哉と存候是又六卿へ俾行向之事前文候通に候猶相分り次第可申上と存候過日庭田之事被示此人も中々一勘考出來候人にあらは無之只々眞之附合計之りこう成人物と存候仍答如此候也

廿日

過日來返米之義段々恩借之上隨意相願扱々恐入候其上は懇切々之段畏入候漸都合候間一兩日之中返上候尤今日馬申付置候故一兩日之中には附可申早々返納候吳々延引恐入候宜々御斷御禮申上候過日は御珍敷ゆば拜領畏入存候御禮申上候也

一〇四 千種有任書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年十月廿一日

追ふ此間は御馳走難有く御禮申上候暫く御不沙汰申上候此段は御
斷申候何卒早く隅州上京を相待候各へもよろしく御申添願上候
全體六條久世様も實く心中あさましく存候事

彌御兩所御機嫌克被爲成恐悅奉畏候祖母公御機嫌克自余無異御安慮可被
遊候扱夜戌半尅比御使中院梅息以一紙被申渡

千種侍從

兼る門流より相達候義も有之候處去八月三十日結黨及建言候段不憚
叡慮不敬之至依之差扣被仰付候

右之通蒙 勅勘謹御請申上候番兵は未だ來り不申候相待候事に候就るは
定る勤 王之大名正義之銘々嘸憤起仕候事と存候殿下は昨日より出仕に

相成候由定る徳中分之差圖并 叡慮之處と被察候全體先達之節殿下は
大に保詞褒も有之候而今更嚴重之御沙汰とは扱く御不政悲歎之事に候又
徳中には異業之體を好み 皇都に行ひ不憚 朝憲不敬之至は何と御覽
哉とあさましく候大原中御若輩を語合と申事有之候由閉門之由に候自余
皆差扣此様子には彌徳奸隆んに相成于今長征も諸藩へ被 仰付又兵庫
開港にも可相成と存候併隅州鍋等此義早く註進有之候は速に上京と存
候何分早く奸吏を清め奉輝 朝憲度存候事に候〇内侍内侍風所勞格別之事
には無之候へ共當月のまけの清めも出來不申につき明日八ッ比下り
之由昨日申來り候右に付明日早朝母公御迎差上度と存候併ながら差扣被
仰付候に就るは里元へ下りも有間敷と如何相成事哉と存候孝觀様之内へ
若哉下りと申様な事に無之哉と存候先は早々申上候也

十月廿一日

雪々また白きはなにも降つにかり此ことくみそ世を清めかん

みるの水其水のみもにこりなり末とり早くせき清めらん
上 遠

一〇五 岩倉具視書翰〔宛名缺〕慶應二年十月廿一日

尙々亂書可被免候也

寒冷益御安康恐悦存候抑昨日備長内々面談仕及一探索候處實に此度は盡力周旋可仕御覺悟之由尤國元におゐて京師之御模様も伺居實に驚動早速上京之處暫時も猶豫難仕御形勢一藩一致之由申居就るは委細之次第申上度候へ共今日は少々他出仕かね明朝は是非參上巨細可申上候内々御噂之事も色々工夫仕とうぞ先方より咄出させ候間御安慮可給候夫に付る篇と申含盡力之事申付置候元より底心は三十五萬石滅亡之覺悟之由申居候双方相勘候に全薩同様之意味有之候委曲明日可申上候昨日早々可申上之處談論及數刻延引に相成候荒々如此候也

十月廿一日

一〇六 坂本靜衛書翰〔岩倉具視宛〕慶應二年十月廿三日

昨日立川生の御沙汰之趣拜承仕候然る處庭卿に少々不安心之事有之候に付右探索中御差扣に相成候方と立も心附候故御書翰返上且同人を委細申上候事と奉存候間今日右庭卿之件藤井九成松但邊を深く及探索辛して要領を得候處彼卿大に御憤發之よし大好事に御座候左すれば昨日立取事も夫にも不及候哉尙深御熟考右委細之事は未發之事故憚筆記候故櫻を御聞取奉願上候彌と之時は中にも御打合に可相成哉に候

○薩にも昨浪華之便着小松帶刀大島三右衛門着坂之よし定る最早京着歟不遠模様も可相辨候○兩士の御報は都而御出に無之は口述は難く候○澤卿一件一昨日中公に於北卿御列席渙然氷解之よし且澤卿中公之邊を大に喜服之趣承候謹言

(道別は坂木靜衛也)

十月念三夜

道 別拜上

言 上

一〇七 岩倉具視書翰「井上石見宛」慶應二年十月廿四日

前略過日は多罪極り候一帖入覽如何御思慮にや御治定候御模様承知致度候但し御一見限り不可然の見にも候は、勿論夫迄之事一帖申下候亦萬一密に可被行にも候は、かねて愚見申入候事にて兎角補佐に有んか鷹久中と雖とも右に有るならんか着眼の方も候は、只今より窃に御往反にも相成候得は始終

朝廷御爲めやと例の存附儘申入候

十日 陽公殿兩役件 十一日 山宮殿原一件各畫餅となり

十六日 斷然 御沙汰參 朝の次第仰天愕然候更に方角なき事に候

此上御推任云々風聞苦慮之限り也過日 宣下にても亦罪を鳴す云々實は

不伏不可言偏に此時を失ふて何とか切齒石龜のじたんだ致爲候所追々拒沮公卿も不少旨密々傳承恐悦此事と存居候足下には彌 宣下ある方一きとの卓見にや試に御示し可給候元々予限りの事一筆頼入候



一件今日は可分今日はと存候此便延引候様々隙取候ては是も先不成方かと存候歎息の事而已多く貴國の上京何故遅きや春にも可成にや柱石なくては小屋も不可立其中ち下手工の繩墨打間敷にもなくや備臣の高論傳聞候得共決して不可頼物の由何事も何れか是なるや紛々の事に候得共天下の事漸く是より始り可申か

正三卿退役速に 聞食何らの事や頓と不解事に候

過日も申入候通りに付御承知置被下候事と存候得共當節又々異説出來にち里見小林之二士猶小子方に潜居其上有志輩離間致候杯跡方なき事共申觸者有之哉の由何事か九々不解候得共御心得可被下候或人間何を以て讒りを解ん文中子曰く辨するなかれ是を守んと欲し候得共餘り齟齬而已一

言申入候事に候

十月廿四日

具 視

井上石見殿

一〇八 千種有文書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年十月廿八日

此ふきのとう相認候間乍少進入候也

積雪一入寒氣増長候彌御揃御安清恐悅候然は庭田事過日來山科能登介行
向種々説得候而彌此比黨取結候而奏上有之候由に候併過日尊公御噂之様
之工合とは違候由に而大凡は過日之廿二人之應援と申事に有之候然る處
唯今此書中相認候中に從伴文通有之昨夜以 勅使廿二人之人へ差扣被仰
下候由扱く恐入候事に候大原中卿には閉門之由別るく氣毒く存候
實く此上之 朝憲之をとろへ徳中之盛不忍見事尤殿下は昨夜を出仕候
由に候尤惣而徳中を毒廻り候事必定と存候嘸々有志之輩には憤起と存候

併是は格別歎には不足候へ共只々 朝儀之おとろへ悲歎千萬に候實に々
々此上は隅州には何と等閑之事哉所詮隅州上京無之而は何事も分明には
不相成と存候尊公にも何か御所存も有之候哉伺度候左候は、庭田なども
又く尻込と存候何分正儀之大名早く上京待入候事に候過日徳中參
内之砌は誠以莫大之獻物多分之黄金之由に候段々御不明義之事共と存候
節角六條へ申入候義も中く被行候義に而は無之と残念く存候何事も
所詮正議之諸侯上京迄は不被行と存候又右之次第に候は、定而卅日迄に
は將軍宣下御内意に而も可有之哉に存候何分早く正議之隅州に而も上京
之工夫は無之哉と存候猶又御論相同度存候○堀川殿には恐悅存候仍右申
上度如此候也

十月廿八日

井

對 公

一〇九 前田有藏書翰「岩倉具視宛」慶應二年十一月七日

誠恐誠惶再拜稽首敬白

益御機嫌能被爲在奉恐悅候然に昨夕何の思慮も無御座公然當亭へ參り候處 御窮屈に被爲至候趣奉拜承候素り左程愕然仕り候筈も無御座又 殿下にも泰然御領意被爲在候御事とは奉存候得共御不自由之上の御不自由に御憂鬱に可被爲在奉恐察候然共鎌倉之窟東湖正氣之歌文天祥正氣之歌等を始め正氣鬱抑之古人皆我友也と仕り候得は艱苦之及はざる事未た遙也何卒法然之氣を被爲養一伸之御時節被爲待度奉祈候事

一過日極密御約諾申上候義も斯く 御嚴密に被爲至候は何分にも 尊慮に不被爲在御次第も可被爲在奉恐察候 微僕義は晝伏夜行に當家へ折々參り候事は大丈夫と迂考罷在申候 殿下に於る入谷を以て御傳命被仰付候義御不都合に不被爲在候は前日之一策御條約之通りに參り候義に候得は微僕に於るは難有仕合精々盡力仕り前言に復し申度奉存候

若し當分不可と被爲思食候は、不及是非微僕義も四方漂泊之前言に決心可仕歟と奉存候事

(宇栗は宇田栗園)

一前日御條約申上候義に付京地に見込之胸算少々相運び候處どふも金子少々無之は基本確然相定り難く仍る途に宇栗へ參り面皮を覆ふて談話仕り千金を御借り入れに相成り明年より二拾石つゝ年賦に御拂ひ入れ之周旋聊其道に渡り置き近日相分り候約束仕申候尤微僕右に申上候如く基本相立候金子凡二百金は無御座候は確然たり難く候故右千金之内八百金を以て御用に相成り二百金は當分微僕拜借を奉願追々返上之道に向ひ候胸算に御座候仍る急に大金相運び候様盡力仕度尙亦委細急に言上仕度昨日罷り歸り候處不圖も御一變之御都合不及是非次第に奉存候斯く被爲成に候は金子御借り入れ且微僕拜借之心願等御採用之義も御不都合之御品も可被爲在歟尤俗客之警衛は中々一月二月に不相濟是等も長州片付き不申は御濟に相成不申候や然は萬事過日之

御條約通り参り可申之御密策被爲立候は、微儀は粗漏無之様相行ひ可申奉存候御密策不被爲在候は、急に宇栗之變約も仕り一身も漂泊に決し候の外無御座候宜敷御勘考御良策を以御指揮被仰下候様奉懇願候事一京攝困窮之時を不失墨夷夥敷米を運び來り下直に賣り拂ひ大坂米價稍下直に相成り候趣坂人抔は亞米利加様と申候由不堪切齒次第必追々時機を不失并吞之策を施し可申不安次第に御座候事

他何も異聞無御座候天下之妖雲何の時か開かん萬事見聞に備く候間當分愈塵外に遊心仕候決心に御座候再拜稽言謹白

十一月七日認

前田有藏

御側中

一一〇 千種有文書翰岩倉具視宛 慶應二年十一月八日

先以御安康恐悅候抑昨日は御念入御返書畏入候實に今度山階以下御所置

扱々無申條悲歎之外無之候別尊公には一入々々氣毒く之次第尤御同様之身上に尊公計番兵被付事實く氣毒く申上様も無之候故先々穩成物共之由珍重存候嘸々何か御不自由を恐察候大原には門前晝夜捧持立居候と申事に何共く如何之事哉と存候扱仙藩漸には明春早々長征と申事に候又本宅番兵水口士漸には過日從德中申付普代大名一同胡服相用候様との事に候尤水口士申候には大に不同心之旨申居候由に候追々御不明義既御神事後には將軍宣下も可被仰候哉と被察候左候は、打續き長征并兵庫開港夷人入京など可出來哉と存候就るは堂上には最早腰ぬけ者共之上猶更此上は手を出し候者は一人半人も無之候扱八月三十日列參も決る薩并有士輩なと腰押に出来候義に毛頭無之候へ共何分堂上には權無之故々様に相成候上は最早乍殘心一も二も無之候然は此上は乍御不明義武家之權威かり候る今一度御明義之立候様に致し候る外無之既昨冬も陽明へ薩を申上諸藩被召候様との事則内々言上に上を被仰出候様陽

明々尊公へ御噂之由に於て申付言上候事も有之候左程迄薩には諸侯召
之事周旋之事故へ今度は早速にも大悦に於上京奉助 叡慮候哉と存候處
存外等閑之事故薩にも此度は容易には難上京西國大名各語合一致之上可
上京哉之旨過日入谷嘶も有之候へ共是も推察候義に於て致候嘶にも
無之哉實に、此上傍觀と申最早場合に於ても無之薩意内如何哉と存候又
尊公にも只々御悲歎のみにも暫御傍觀と申御事哉且兵士も居候哉には候
へ共何とか御勘考は無之事哉尤過日入谷も噂之通に於ては如此番兵不被付
共番兵之付迄今一應廿二人周旋可有之左無之は有士之藩難出と迄薩之
噂之由申居候左候は、右望通番兵迄被付候様に相成候事故最早何れか憤
起有之そな物哉實に、諸藩へ形勢如何成事哉備加筑三藩も既方今之御
所方御所置不面白とて歸國候哉之由風聞或は右三藩之上書候由風聞如何
哉右様に節角上京候共歸國候様之事に於ては只々諸藩被召候様周旋蒙 勅
勘迄は功無之素々於 宮中は關白始一人も正義無之故只々諸藩さへ被召

候へはと存候各列參言上候事實に諸藩之處此上如何存意哉吳々、薩
意内探索眞實之處承度物と存候當冬中も上京は無之哉左候は、追々六ヶ
敷御次第に可運と存候併實に手を束見て居る外無之御形勢には候へ共爰
迄慷慨致候事何卒、責を諸藩之手をかり候成共今一度周旋に於て天下
四分五裂に不相成様之致方無之哉尊公にも何とか此上之御見込も可被爲
在吳々相伺度候尤所詮、爾後は役人衆之中六條逆も何を申るも役に不
立何卒薩に於ても上京四五藩申合只々殿下へ詰掛一步も不退して議論申上
御明義立直し上不申は不叶義遵王所に於ては無之神國への御奉公と可申扱
て又甚々難申事ながら 宮中奥向も近頃は追々御風儀替り誠以敷敷事共
被爲在候由に候筆紙難盡事共に候是は拜顔ならては難申上候吳々心事申
上候御見込之邊相伺度候仍此如候也

十一月八日

井

極密

一一一 大越伊豫之助書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年十一月廿三日

冒瀆威嚴含毫拜呈追日向寒之時節益 御機嫌能被爲遊御凌奉恐賀候扱當
月朔來 御本殿御兩君御始 御殿にも幕士之警衛嚙々被爲惱 清情候御
義如何可申上哉日夜奉恐歎候乍併雲霧何日豈無晴 愚生も去る庚申之度同
盟三十七人薩藩遊説に罷越候節八月は明年七月迄閉居歸藩後十九ヶ月幽
閉に晝夜番兵相付られ候節は鬱懣譬無物幽閉多少之情能々熟味仕候得
共實に絶言語正議は可相止なと心得候折も有之候得共やむにやまれぬも
のにて又々千辛萬苦只今之姿と相成候得共何も國家之爲と甘し候外無之
候當時非常之御中か不淺 尊意を以煙草之美葉拜領誠に恐入候御義不堪
恐懼奉拜謝候誠恐惶謹言

十一月念三日

正道拜

(正道は大越伊豫之助也)

對岳老卿閣下 謹上

尙々時下爲國家折角御厭可被遊候將又先達るは 芳墨拜誦御懇之被
仰聞萬々奉謝候

一一二 前田有藏書翰〔岩倉具視宛〕 慶應二年十一月廿九日

恐懼再拜謹白

奸網雖嚴密益

御機嫌宜被爲在候趣爲

天朝奉恐悅候然は 微儀義過曉出京以來處々奔走仕候得共彼一策も胸算悉
く齟齬遂に難被行に至り愧縮恐覺實に心外此上無御座候今冬は金子大泥
滯に平生貸付け居候者も當惑之筋不鮮却る假るの道を周旋仕居候程之
事に御座候趣偶貸し候者も有之二千三千を出し可申者も御座候得共夫は
過分之利息を取り候趣左様近來諸侯へ貸し候金子の利息誠に過分之趣所

詮夫には話し仕り難く但且又當時勢其上幽閉方の事は孰も危疑を抱き何分にも六ヶ敷形勢に相聞へ扱々煩はしき事に御座候此區々の事さへ齟齬如此最早天下之大事何敢て説かんと俯仰慚愧畏懼切齒汗顔罷在候乍恐御憐察御慇笑被 仰付度奉願候

一昨日は午後江州坂本出立仕りきらゝ越より下り山中へ参り候得は已に昏後に相成り一酌寛話夫々入谷へ潜入仕候深更故参 殿不仕候き今夜は例之如く罷出拜謁仕り尙委曲心情申上早々出 京も可仕心得に罷在申候

一山静へ参河之人某参り居り候亦小岡二士之安否も承り申候甚健に奔走仕候趣近々濃州へ参り夫々出 京之舎と聞へ申候素り近來の時勢更に相分り居不申候得は近畿に於動靜承り定る驚愕可仕候何卒江州邊に於委細傳承仕り用心御座候得は宜敷候得共千一突然参り候亦は如何なる危事に御座候も不可量やと掛念仕候右三河人へ二士送別之趣忠孝の道

や身にしむ寒さ哉小林の出任か孝忠々々千里涉山河君拜紫闈日定知血涙

多岡田之趣に御座候

一列侯を徳川氏へ將軍宣下の建白も多分有之且各歸思を抱き已に加賀藤堂筑前邊は發途にも至る勢とか承り申候今更怪に足り候事も無御座候得共實に諸侯不足頼爲 皇國悲憤之至に御座候

一關東火氣熾々之風説 御聞知被遊候如し志士之一策に出候事なれば宜きもの也と面慮に不堪候

一土人にも面會仕候處土國之形勢近來大分宜敷方とて憤發仕居申候長々参り居り候土佐守の室も幽囚同様に致し有之候處近來大に寛に相成り且四五輩有志之者を宰府へも遣はし容堂内意彷彿たる趣追々合する之策を相立て候勢に於右四五輩筑前過日上 京仕り薩邸へも参り彼是周旋仕居候趣に御座候右の者之嘶に小倉に出没して舊城回復之策に出て小戦毎度有之候處長兵大に其巢窟を屠らんと仕り相方激戦に相及び長兵も余程死

傷有之候得共遂に勝利と相成り小倉は愈降伏之趣尤薩邊も周旋仕り候様子に於小倉屈伏敢る長に不敵と申すに相成り先治まり候由に御座候勿々亂筆不敬之書體奉恐入候得共 御照讀奉願候宜御取成可被下候 恐惶謹白

十一月旬九日

前田有藏

御執事 中

一一三 岩倉具視書翰「坂木靜衛宛」 慶應二年十二月廿六日

坂木靜衛殿

對

内々無事用

廿五日書狀同日一見至極御尤と存候に付井上へ一封遣候て速に引續き幕吏内應接決心右は守兵田中を以內談梅澤承知の次第にも運ひ候事旁執行且又 宣下賀使も速に可差向と進物都合も勘考の所廿五入夜今朝に至り

主上御容體以の外に被爲在仰天恐愕實に言所を知す天 皇國を亡んとするや臣進退爰に極り血泣鳴號無量の極に至れり於臣一身にも吾事終れり一世の果爰に止り片言と雖も最早述るに所なし眞に樵夫に決し申候長々段々盡力補佐以御蔭聊方向を辨し少しく胸算を立追々投身盡力と存候處悉皆畫餅となり千世萬代の遺憾と言へし只々嗚呼々々頓首

廿六申刻

居宅の事新三傳聲と田中周旋の旨齟齬候得共彌寺町御靈社内治定と存候御引移り何日頃哉承度候也

一一四 中御門經之書翰「岩倉具視宛」 慶應二年十二月廿七日

北山大人

和老人

机下内啓 御覽後早々御火中

口上

(和は子中和の略にて中御門經之)

一昨日御細敷何も承候實に言語に絶恐入候義只々悲歎之外無之候
一右に付已來世事一切御構無之との事承候扱々御心得違之義と存候過日
建言之節自然不被用節は可退申上候處夫は漢土之義於
皇國は或間敷義是非に不抱終身可盡義と御教誡候然るに今度恐入候義
に付右様御決心は不得其意候彼
皇統一系神孫之義譬幾主相變り候共皇國之御爲忠を盡候義勿論之儀殊
今度新主以正儀補佐一大事之場合と存候爰に御一新御政事相立候は
皇國之幸甚不過之と存候漢土にても諸葛亮事後主盡忠候事に候又於吾
朝 後醍醐天皇崩御之節諸臣各隱遁之思有之熊野別當則
皇統一系之義申出新主補佐勿論之義申論諸卿解悟夫より新主補佐に相
成候義此度も同様新主御補佐肝要と存候間彌忠魂御貫徹之様御周旋勿
論之義と存候何卒大義御忘却無之

（中卿は中山忠能）

皇國之御爲御盡力偏所祈候此段赤心申入候
一中卿へ之事御心切畏入候へ共其道無之大に當惑之事に候御勘考に被
仰遣候義は相成間敷哉今度出仕不被 仰下候は實に 朝廷御不明萬
代に不朽次第實に悲歎之至に候二公へ内々申入候處御勘考と申事に候
へ共今以何之御沙汰も無之如何と苦心之事に候
一督印同上二公へ内願候へ共どふもおもしろからぬ様子に候扱々力及は
す何事も歎息之事に候
一御令妹之事何も承候先達之節も得と申入置出頭之心得は無之旨に候尙
又自然之節は得と可申入候
一差當り御葬送迄は先此位にても宜候へ共諸役人改正無之候は迎も皇
國正論相立間敷存候差當り殿下家來三人野印家來二人是はとふかせね
はならぬ事に存候此已後は彌廣野久大勢と存候夫にても迎と存候二印
も彌此儘にても迎と存候何卒早々一統幽閉被免中山出仕申合萬事忠魂

相盡度存候事に候

一昨日中伺御機嫌之事

一今日近習 御對面に候

此様子に急々御發と被存候どふか年越にならぬ様との事に承候此段も爲御心得申入置候

吳く不寄存知事扱々殘心くく幽閉輩出仕之上に候は、又御取直しも可有之候へ共其儘にケ様之御事に付御不徳萬代不朽も人口に相残り實に殘懷之至に候せめて

新主正道御補佐之義盡力仕度存候へ共何分只今之姿に於は不及力義悲歎之外無之候中卿之處御勤考偏願入候又小子之通路之御勤考も候は、御教示願上候頓と其路無之困入候事に候何も宜願入候早々以上

十二 廿七日

(中卿は中山忠能)

一一五 富小路敬直書翰 岩倉具視宛 慶應二年十二月廿八日

追ふ只々心濛々として前後不辨候文面不都合乍例御推覽御免願上候昨日は不存寄佳肴拜受畏存候右御禮申上候月迫來陽申殘し候早々以上

昨日は御細書令拜披候彌甚寒之砌御壯健令恐悅候陳は
主上御痘瘡不容易御容體實以恐入候御示之通天 皇國を亡す時ならんか
實泣涕悲歎無此上正大之儀言益以不納乎慨歎之極最早首陽之巖と存候僕
幼年御前勤仕之儀更に懷舊之情難忘只々悲歎に暮候尊公も御同様之事譬
汚名沈候共又々 天日之明成を拜事も有哉と心中内望失候貴君御心中も
恐察候自今以後彌以進退之處も無御隔意御示希上候何も荒々如之候也

十二月廿八日

久かたの天つ日つきの雲かくれはるゝ事なきみかけかなしも
大みゝのもかさのさしも重ければかくれましたつと聞そかなしき

御加筆願上候 請

對 岳 大 君

机下

清 廬

(清廬は富小路敬直也)

慶應三年

一一六 山中靜逸書翰「岩倉具視宛」 慶應三年正月四日

(山中靜逸は三河の人、獻と稱す)

奉謹啓候昨日は參殿御愁歎之御中をも不奉憚失禮過言何共奉恐縮候今日中御門様の參上候處則澤卿一件御托有之即刻罷向候處折惡敷彼角田不在に遺憾千萬何れ明早朝に再行多分は盡力行届可申と奉存候

一久々にて中門様御咄奉窺候處益御盛にて實以奉感候大原卿兎角幕云々之臭氣とて大に御歎息に御座候鄙生よりも時勢云々先幕長薩合して奉仰 天朝を候様可相成と申上候處御沙汰には中々左様は參る間じく全幕滅之時こそ至れりと之御言確乎として不可犯附るは正邪合一之御策等御周旋は如何にも口を難出且余り色々と攪交候るは一も不取二も不取と申様に可相成且紀に附る云々は余り〱迂遠之事に奉存候實に於閣下守兵を以て梅の御渡合に相成候一件は千載之一機會と奉存候間何

共奉恐入候得共御私情は暫御差置被成實に三千年來之御危難を御匡正却る萬歳之御基本相立候處を被思召何卒壹貳ヶ之御煩勞を被爲忍彼之守兵を糸口と被遊今御一言之處御苦勞奉祈候鄙生も昨日之御高論に服し直に薩人の程能位に談し候處決して沸騰は生す間敷候深く一盡力仕度奉存候竹原も固より航海に付るは同謀之事故御前之御事等委曲は不申候得共幕中に入る一策を可運と申候處同人も大に喜び然は東行を暫差延べ有志中にて又如何様之異論起候節有志中之探索を周旋乍蔭鄙生之一策を可助との事也仍而鄙生今日之處を退候ならば四五日中速なる方大によろしく候間何卒乍恐御寸答奉拜領度奉願上候乍併於御前皇國之事は聊も御憂不被遊只々御壹身を御過し被遊候と申外御尊慮不被在候は、迎も於鄙生は御前を除く外他之御堂上に奉從候て之盡力は一動も仕候心得更に無之候速に他行仕度何卒乍失禮右之件々今一應被加尊慮速に一兩日中に御答奉窺候中御様之處澤卿御使丈け何れにて相

勤候得共御前之御決心次第にて是迎も再は罷出間敷候頓首謹言

正月四日

二白御愁歎之御中へ右様俗事申上候段奉恐入候間鄙生進退に於る速に不相決候半は甚迷惑之事既に昨冬好機會も有之退去之決心に候處閣下之命に仍て相留候旁深被爲加尊慮候様偏奉乞候不具

北山公閣下

靜拜

御近侍御中

○

以副啓奉獻言候鄙生所志は何處迄も皇國一和之策を盡力仕度乍然鄙生淺學之至獨力周旋は決して難爲候間只々閣下之御取捨を奉仰候間仰翼は鄙生をして宿志を令遂終らん事實に今日閣下之御進退に相係候間誠に御愁嘆中奉恐入候得共御決答を奉祈候何分本文にも奉申上候通り滯京周旋に候得は速に彼方を辭去不申は大に疑

惑を生する之場に可至しかし於閣下御引延し不被下は滯京は一日も無益故猶失敬昧死奉申上候頓首謹言

同日夜

昨日申置書物呈尊慮候緩々御留置不苦候

北山公閣下

静拜

御近習御衆中玉机下

一一七 香川敬三書翰〔岩倉具視宛〕慶應三年正月四日

言上

武 明百拜

誠恐誠惶謹々奉言上候

崩御之御事拜聽仕恐歎悲泣手足之置處を不知日夜血涙に沈み罷在候鄙僕等に於るすら如此まして殿下に於るは何程歎御驚愕御悲歎被爲遊候御事と奉恐察候誠に非常中之非常に而國家之存亡如何共致方無之茫々然と泣

くらし罷在候乍去

皇太子御

踐祚被爲在候趣恐慶之御事に奉存上候何卒此先は御一新被爲在候趣奉祈候昨年山中靜逸申居候に

皇太子御輔翼第一有之度旨申候所最早其場に立至り申候誠に其節は左程之事に存不申罷在候所誠に良言に御座候偏に御一洗奉仰祈候

一舊冬は御懇命を相蒙千々萬々難有仕合に奉存上候此段厚御禮奉申上候一新春に相成候得共御年賀申上様も無之恐縮謹慎罷在候早速

崩御之御事尙又御機嫌も奉伺へき之所右御大變に付前後忘却罷在候間得不奉伺候段御仁免被下置候様奉願上候返すも此度之御義に付此先如何相成候者哉悲歎に堪兼暗に燈を失ふも尙甚しく前後往處を不知日夜と

なく泣涙萬行罷在候右多罪之至に候得共奉呈愚書御機嫌奉伺候誠惶誠恐稽首謹言

丁卯正月四日

一一八 井上長秋書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年正月十二日

如尊命無存懸御大變 皇國一體の衰運實に爰に至り何とも恐入候次第天
を仰き悲嘆仕外無御座候殿様方には殊更御親敷被爲在候御事一般の御苦
心奉恐察候乍去尙此上先帝の 御神慮不被爲安候不叶譯に此節御建
言の一冊拜見被仰付別難有篤と奉拜見候兼御説は奉伺候得共御認之
上にては殊更御赤心相顯れ肺肝に徹し奉感伏候何卒御建言の御趣意貫徹
仕 朝廷の御居りに相成御動搖不被爲在様有之度念願奉存候將亦此上粗
暴激論云々且幕府甘言を以て欺き萬一其策に陥り候ては如何の御深慮厚
く奉拜承候中々油断は不相成候得共此度は余程能都合と申事に御座候乍
然遅引に相及邊の處如何にも心痛仕候先は右拜答如是御座候可然御披露
奉頼候以上

正月十二日

長 秋

前 中將様

御近習中

追啓乍末筆珍敷御漬物頂戴被仰付難有仕合深々奉拜謝候藤井高崎同様
御禮奉申上候御建言別冊奉返上候若亦内府公にても御差出し相成候は
、何時にても可奉呈上候

一一九 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年正月十三日

- 一 昨日御書何も拜誦候
- 一 御葬送後の事多分無相違哉由扱々恐悦之事に候乍去正邪混同に由は出
仕頓と不好候曲直正邪可正折柄混同に由は最早出仕之心得は無之候又
々正義相立候節出仕可致と存候
- 一 尹印兩役勘考之事何かの拵かと被思召儀御尤に存候乍去先達建言後も

尹引籠は幸之事何卒出仕無之様致度と被申居候事は承居候間今度正は
出仕彼尹も出仕候は又々大變と被見込彌出仕無之様勘考かと被存候
一過日さる方にも會藩之者嘶に今度

新帝御幼少に付尹印後見ならては天下難治と申居候者有之候由に承候
間今度正邪混同出仕周旋は德會の主意と存候彌おもしろからぬ事に候
一過日被示の建白寫可返上被仰越書共未賢息を御傳無之候例之御寛息扱
々感佩之事に候右に付早々御返上可有之賢息迄申上候間御用濟後何卒
拜借願入置候此段申上候
右早々御受迄如之候也

正 十三

別紙玉吟任仰無沙と愚存加筆返上候失敬高免可給候

北 岳 大 人

机下内々

和 翁

一二〇 中御門經之書翰

慶應三年正月十六日

口 上

別紙只今愚息を申越候間早々入高覽候扱々不揃御所置同事出仕不出仕相
交實に方角不相立事而已大長息之事に候御一覽後早々北様は御上願入候
早々不乙

正 十六

子 秋 公

和 翁

一二一 千種有任書翰

岩倉具視宛 慶應三年正月十六日

各へもよろしく

彌御機嫌克被爲成恐悅奉畏候祖母公各御無異御安慮可被遊候扱昨日は別
紙之通扱々變なる被免様尙以御不明片身うらみ之儀頓と不解候且圓眞

(北様は岩倉具視)

公杯扱くきたならしき被免様又中務卿以下は全體御不審之儀有之被止
參朝有之候處此度思召と改て後后改心とは何を改心之事哉全體御不審之
儀を改心とは如何之儀歟且石山息杯は實に間違之儀に被爲幽閉有之處
本番所參勤とは扱々御不政く又正親も同様御不審を改心とは實にく
をかしき事に候又鷹司は元來被免有之候處内々二條之心を以彌所勞御參
無之方可然と申有之候處此度表向に出候は是又如何何分氣狂違之取計故
相分り候事は無之筈は筈也

○源内侍之儀梅溪を返答有之早速六條へ被申入候處誠至當之願實に自分
等同様に被存候る尙相役示談可致と被申居其後六返答には此度御暇之儀
は殿下格別之御憐愍にて下薦するがを以御手掛夫々へ眞の御用相伺候哉
御尋之處綾小路之は一寸御用と承候旨返答源内侍小式部内侍山本女等は
御用不承候旨返答に付御手のかゝらぬ者を薙髪も氣毒之由に節角御憐
愍之所へ更に右様被相願候ては如何故不被願方可然との由則山本にも表

向一紙を以被相願候得共差返し候次第乍氣毒右返答傳候様六々梅へ沙汰
有之候扱く不當元來相願候處は眞の御用は不相伺候共御手掛り之名目
有之候るは嫁付候事恐入且

天皇思召之邊も如何可被爲在哉と申願候者を只御憐愍故とにて御憐愍に
付る 天皇之思召を不察候はいかなる故ぞ又六印尤と被存候儀なれば強
る殿下へ申御憐愍はさる事乍御不明には不被爲替候故と諫奏も有之度之
處右様返答は則皆薙髮料澤山に相成故に御不明も理も不相構只々へいへ
い之甚き故也と存候實に淺間敷くかゝる奸臣を天何故に不被咎候哉と
長息之事に候○鷹印出仕之上は大に内府之力と相成是るは追々口明き候
事と存候中卿にも面白かり被居候乍去九條家之様なきたなき被免様にて
は不被免も同様且却る此御姿之方は宜と存上候事候早々頓首

正月十六日

遠

上

(遠は千種
有任)

一二二 千種有文書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年正月十七日

昨日は不取敢急申上候扱此度幽閉解之件々如何被思召候哉誠以不同如何
之取計方全體誰之趣向に哉元來壬戌幽閉は 先帝深思召も被爲在候得共
只々奸臣陽内府尹等の妨奸にて節角之 叡慮も不被爲立既昨秋八月卅日
列參之後も陽内公之内奸にて彌到當時候然る處 先帝御違例中崩御後も
陽父子段々幽閉之儀御取持之趣然る處當度圓心公之御所置振情相考候得
は是抔誰の取計哉左候は、陽内公は矢張壬戌之分は御奸妨哉と被察候尤
過日御噂之邊御葬送には一同幽閉解并大赦との事に候得共一昨夜之御所
置振に於は幽閉解之事今暫先是に於相止り候事哉と被存候夫故圓心公右
様之處へ相成候事哉實に薩如何計周旋候共頓と、其所詮無之次第殘懷
く之至に候左候は、此跡いつ迄御捨置哉難被計と存し候併圓心公之様
な事に候は、最早御沙汰無之方却る可宜と存候實に此上は乍恐只々亂世

と相成動干戈候を相待より外無之左無るは所詮奸臣遠之目覺候事は無之
益只々奥表共に我慢奸邪のみ局衆之處も内侍不殘御暇或薙髮一人も不被
殘は准后殿へ内諭之由に於どうか准后女房八百長橋に可被成との内心之
趣に被察とか申事に候方今は准后帥典侍兩人之我慢に於大輔内侍などは
大閉口之旨に候先達來中卿にも女房向之事色々周旋に於候得共表裏に於
督典侍大御乳など御暇とは扱々御不憐愍く、中卿にも大不懷之趣に候尤
之事に御座候
新帝には毎夜く御枕へ何か來り御責申候に付御惱と申事に於昨日申上
候通御祈禱被仰付候とか實説之由に候廣橋には大我慢大勢に於議奏不殘
是卿に組し之由尤攝政殿も只々因循之方故何れも廣卿に隨意併鷹司前關
白被出候得共是迎も何分攝政殿右様に於は迎もくはか、敷事には所
詮まいり難哉何れ共に行末如何相成候事哉尤亂を待より外無之候得共即
今中く薩長并西國列侯亂を起し來候様之形勢も不相見哉左候は、先々

是に於時世打過し候は、追々公武御合體に於下々の難澁は不被思召只々御合體に於好を行ひ御明義は失ひ男女共に上を奉恨候者多端夫か皆上へ重り扱へ、恐入候事に候追々諸色も沸騰物價高直到此節又々萬事米以下一段二段高直に相成下々之難義不取計と申事に候尤尊公には過日被示候通世上之儀は一切思召切武家内々御往反も御停止に於只々御默然之思召御尤く尤も有之存候間決る御手は御出しは無之なから行末如何被思召候哉不遠内亂發一變候事哉何卒く御見込伺度候昨日は急倉卒申上候間尙又乍御面働一筆申上候也

正月十七日

追ふ昨日入御覽候書面一寸入用候間此者へ申出度候去十三日夜星月を貫通候是も随分折々は有之候事に候得は當時之儀何となく心に掛候事に候全體は不宜事に候

(自觀は千種有文)

自觀

對岳公 内話

一二三 千種有任書翰〔千種有文宛〕慶應三年正月十八日

今日之御返事は跡々申上候餘り鶴待せ候間右之條々申上候御繼承候也

(本書は千種有任の書翰にして第一二五文書之冒頭、別書云々即ち是也)

御書難有奉拜見候彌

御機嫌克被爲成恐悅奉畏候御内一同無異御安慮可被遊候扱御政事之儀情相考候實に御内儀表共に同服追々御不明之事已實に依御凶事被免候處之義に候得は無殘 勅免公平之處同し御咎之中にても残り候者も有之實に片身うらみ之義且又圓眞公以下洛外住居之義は元浪士之讒并依投書浮浪之氣安め之爲洛外住居被 仰出候義然るを此度未だ住居之義は洛外と被出候義實に前條に違甚御不政之甚也圓心公 還住于今別居に退き無之由實說なれば面白き肝也夫も眞實之 勅命なれば又退き住之處もあれど甥之

攝政之命なれば左も有之筈也實に絶言語候不政已又於御内儀は若年故御憐愍にて御暇とあれば清水谷女も同様之筈之處同じ御手掛り之仲間に清水女は新典侍と宣下にて直に新帝御附と相成又小式部源内侍等は御憐愍こかしにて御暇夫も本人も御暇を悦ひ候は御憐愍之處も有之候得共本人皆つきについて薙髪を願候者を剩廣橋に告て議卿之命を以里元を説得とは實に何が御憐愍に候哉願を叶ひ被下候社御憐愍之廉も相立候半歟只々一端

萬乘之君へ差上候者を御暇とは實に〜いかにしても勘忍難相成 朝廷より禮義を御亂し被遊候義いかにしても遺憾千萬之義尤我方之女を思ふにあらず 朝威之輕きを遺憾仕候事に候一は是非〜薙髪と申又新召抱に相成候歟二つに相成候は後々之御外聞と奉存候間各正義を改來之上は是非々々復古仕度存意に候定る薩侯杯にも其主之寵愛之女房主他界候とて暇などに可相成義は有間敷と奉存候況於 朝廷被爲在間敷義右等

追々於内儀も不政我儘計に而は實に歎敷故に右御不政を取直し候に亂生し候ては又治國何とも難計全體は二印家之諸大夫を天誅して辭職をなさしめ度者に候左候得は跡は萬なる事と存候且即今薩士徳川へ責付候而開閉盡力に候得共元來徳には不好事故關白又奸議奸傳へ申出候共はか〜敷は難行哉故に存附候には鷹印内府櫻木等へも精々盡力有之候は、大に御道開く之事と奉存候全體高がしれた二印之義強て三公之盡力有之候は、大に面白く存候又中務卿にも盡力有之度者候尤依 御凶事之事に候得は大に被行候様聊も被殘候儀なく茲にてあらひ川に被成候様一應岩入は御示談奉希上候殊に異船も攝海へ來り居候時節一入〜苦辛無絶間候早く正義之世と相成候様奉祈願候事に候何卒〜薩一砌盡力右三四公之中へも申出候は、大に可然哉と奉存候此段宜々願上候先は早々頓首

十八日

内藏助之義承り候

上

遠

一二四 千種有任書翰〔岩倉具視宛〕慶應三年正月廿日

昨日は御細念御書難有奉拜見候彌御機嫌克被爲成恐悅奉畏候御内一同無異御安慮可被遊候扱圓心公御沙汰書之所置は是は内府公杯之細工に而は無之矢張奸關以下議傳之趣向と存候故は若圓眞を立派なる被免様之時は本家以下願に而も相成候得は則友山には番兵迄被付候位奸議奸傳之恐れ者と相見へ候間若右等被免手返し被爲候而は奸臣等之上に有之事故全右歎願杯も無之ために圓眞公重き御沙汰書有之候事と存候中卿にも右之通は推察に候最早此場所に而は内公も趣意無之筈と存候扱極々内々ながら去十日發足に而千訓紀州山本主馬方へ行向幕以下攝政以下のひきめ修行に行居候右主馬は墓目甚奇妙を得居候由也兩人して一七ケ日計祈禱之由右に付路用三金借し候事に候何卒冥助有之候は、大に、正議興行之基

ひと相樂居候何分

大行の御菩提なれば攝政を先刺留て世にやしめさむ

御一笑

右に而無之ば所詮正論之處へは至り難く又本氣の臣等なればケ様之不政は有間敷狂人にもをとる臣等故所詮正論を以て申入候とて難相分節角薩徳川へ格別之盡力候得共正論を以て之儀故議傳杯は難相分尋常に而は改世之期無之と存候最早非常之行ひならては難解故に一昨日申上候通先攝政家大夫一人加天誅其首級を梟木して其立札に辭職之事を述申無之時は又今一人を加へ辭職をすゝむる時は家臣其難を憂ひて不計辭退之處に至り候歟左候得は余の奸議奸傳各ふるふなるへし最早右様之策ならては皇國を清むるの基本無之候右一人二人は氣毒の者ながら皆夫々不容易私欲等有之其身計に而も可然天誅也況爲主爲國に天誅せらるれば本望之義也

右に不至候ては 朝廷御一新之御場合は無之又正義之大藩が亂生し候て御一新之儀は其治り甚六ヶ敷敷先方今之處右様之所置行ひ度者と存候今の有士柔にしてケ様之所へ不至者哉併柔計に有は無之深賢慮有る故には候得共亂之糸口と不相成候様にして右之策行ひ度者也

鷹司并前關内府中書等一盡力有之候得は大に解閉にも至り候半敷乍墓々しき事にも不至則圓眞公同様之處へ至り候半敷と存候何分殺生を刺留るは各菩提となる之勅免は六ヶ敷存候

一 源内侍之儀梅を以追願之儀御尤く至極之儀には候得共元來六條久世之趣意を尤と思ふ様な人物且圓眞公半開閉之事件など尤そふに藤木へ嘶も有之候由右様之人物故申出し候も所詮不被行却る如何と存候且又中卿にも息女之儀に付以坊城殿下へ被相願候處尤の儀なから何分外にも有之一人之事にて無之間願不相叶之由沙汰に候然るに大御乳は薙髮被仰付由也

右様之事に候得は殿下もしらぬと申者に有も無之各同類と存候間所詮申出候てもいかぬ事と存候併猶 思召伺上候乍去御暇なれば御暇にておとなしく請置候たとへ一二年を経るとも正義之時節を待て元の局へ被召出候も更に御召抱か又は薙髮かに相願度存候正義に御一新之上は局之事とて捨置者も有間敷存候何にもせよ殺生を止めねは御菩提に難相成と存候○乍御面憚何に有も茶入一つ御出し御越願度候○昨日は徳治が竹の子鳥等扱く懇切く悦く申候鳥は外へ内々遣し申候○替金差上候○岩入も又々何ぞ御聞被遊候は、伺度候先は早々頓首

廿日

遠

一二五 千種有文書翰「岩倉具視宛」慶應三年正月廿日

前略被免去十八日俾る別書差越尊公へ御相談申候様申越候得共餘り毎々くたぐ敷事計に有御面働且又過日櫻井へ御傳言且御返書之邊も有之候

(別書は第一二三文書に出づ)

故差控居候處又々昨夜別書申越候條入御覽候實に當形勢御内儀表共之御次第如何運付候事哉只々奸と奸からみ付候事にも非常之道開け不申限は迎も〜と存候就は俸書狀之通最早此邊にも二家野家杯の奸族天誅之事何卒尊公御手に御勘考は不相成事哉素々五六ヶ年前之有志共に候は、是迄打捨置は不申哉なから何分其頃之有志とは少因循に相成居候間又々元へ伏し奸族大増長と相成候事に候且先年來出閉之非藏人なども是は別々〜建言仕候事は毛頭無之只被仰付候る國事方執筆に相成居候處其者共右様幽閉被申付況哉此度被免も無之様子扱〜如何之事哉一として相分り候儀無之候尤追々正義之堂上も奸に陥入候趣を承扱〜如何相成候哉併薩には深き了簡有之候事に候は、大に〜頼敷候得共如何之事哉過日櫻井之噂には是非薩には四五月頃之中憤起と申事に候得共是も強ち取留たる事にも無之哉自然此儘今年も打過候は、如何成行候哉御互などは迎も〜芽の出る折有之間敷候猶御勘考希上候也

正月廿日

自 觀

對 公

内々

一二六 岩倉具視書翰「小原口宛」慶應三年正月廿三日

差急一筆頼談候

一昨日御苦勞種々申承り忝候寔に其の所始る出會には能々御懇談と感心の事に候其後未だ御行向無之哉申入置候通り今更事新敷申迄も無之候得とも彼兄弟の懇情左計懸念苦慮致吳候とも不存次第深情の所一身に溢れ實に喜悅候條吳々宜御傳聲頼候扱早々示談申入候義は別事にも無之昨夜或卿を被示候には一昨日比議卿中之話に五卿始め一同開閉にも可相成様子定る尊卿にも及へく定る此間振合と被申越候但廿四日にやとの事也全く御葬送後の事聞違哉と推察候得とも若し此節に沙汰に相成右被申越

候通り過日の如く候は、必九公覆轍に出るべくやと爲に苦心候此間并急御示談被下候次第同士にも元より心附彼是被申居候位の事無助才存候得とも何共懸念に付早々御行向に何卒程能御談し若し前條に候は、櫻公内公等に彼兄弟が今一應何とか勘考盡力不相成哉予にもかね／＼陽公深く渴望御依頼申居候義に勿論兩士ともに追申上居候途も可有之候間不申入とも無助才存候得共九公の如く御沙汰出候は、出沒共に進退極り實に遺恨の事に候條深憐察今一應兄弟に能々御示談頼入候尤小子が書狀に亦も可申入筈に候得とも餘り毎々こて／＼申入候様に如何とも存候上幸に一昨日右之件種々申入候義に付足下より凡そ宜敷演の所頼候尤一昨日云々申居候由に今日御行向可給候亦昨日に其出會相濟有之候は、今朝にも更に面會申入候分に頼候併開閉の事此比には無之全く御葬送後と申事足下御承知之義も候は、右様御申談には不及何分萬々宜敷々々頼候將又子孫出仕被仰下候共中卿大卿始一同に無之候は、云々決心之由定

御聞取と存候是は必一同の事哉と存候間粗忽無之様と心添頼存候差急早々如此候也

正 廿三

或卿の内示様子に如何にも此比御沙汰に被存候間兎も角も其は早々御出會頼候なましろの御沙汰蒙り候は此儘被差置候方遙にまし也宜々御推量に御示談頼存候以上

小 原 殿

内々啓

對

一二七 岩倉具視書翰案 慶應三年二月七日

一簡申入候餘寒未退候得共彌御無事珍重存候然は過日は入來忝候色々拙論申入候處段々高論に預り宿昔之憂鬱聊開明之思有之一入令欣慰候將來時情如何に有之候哉其組中始追々下坂之旨風説に傳承致候若外夷切迫之

形勢にては無之哉實に不堪憂苦候尙又幽閉公卿残り方々不遠開閉に相成り可申趣尤風聞にして更々虚實は不可窺候乍併若干一實に亦も有之候時は追々餘光或は微身にも及ひ可申歎臣唯所仰は兼亦も申入候如く其初め疑似難辨の事情を彼此物議を生し候廉を以て嚴譴を蒙り候次第前日未定の罪を以今日已決の典に被所候ては此上天下に面目を失し候義に付若し御間柄迎彼是憐察にて兩士周旋只何となき御沙汰も蒙り候は、何ぞ感喜拜舞に堪ん粉骨碎身盡力報恩之道も可有之と存候過日も今一應盡力云々深情噂も有之候得とも前條彼是に決答も不申入次第に候若し天日の清光を仰くに至候は、必原子へ面會段々申入候件々も不少候其砌は宜敷周旋頼存候尤方今 皇國危急之秋に臨み臣たる者 御沙汰振により忠義之志厚薄斟酌致候譯は決て無之候得共此上天下へ面目無之候は可盡之道もこれなく候間遺憾に候得共草廬に退縮之外致方も有之間敷候吳々深憐察頼度候實に 皇國今日之大難に當り如何に回慮致候も上下互に嫌

疑を生し區々閱牆に遷延致候は抱腹悲憤交々至り候事に候是恐らくは眞に宇内之形勢を知る者にあらず必管間井底之見より起る所と被存候眞に宜く 皇國を興起し外國之輕侮を免るゝの大策一日も因循すへからずの時也幕府中興之案此時にあらずや幕府之中興は乃ち 皇武中興に致らすや何分宇内を籠絡する大英斷之偉略

朝廷より起り 朝幕大に風雲會合之勢を以る 皇國を維持する之道不相立は不可叶と日夜苦心致候實に憂憤之餘例之多言を筆し粗漏に涉り可申愧縮々々必々獨覽祈念候尙追々入來も候は、委曲可申入候早々不備

二月七日

尙々先日は美菓惠贈忝候此種品赤面之至に候得とも任到來進入候且萬々莫言祈候今日世上人口に係り候は、一大事の次第に候何も早々已上

一二八 岩倉具視書翰「井上石見宛」慶應三年二月八日

過日は御苦勞御禮申入候處速に出馬扱々忝存候其砌は例之多言種々粗漏に涉り定る嫌疑の筋抱腹の義も可有之と深愧入候併悉く憂國至情に出る而已更に別意無之條は能々憐察祈存候嗚呼 皇國かゝる大難に當り 皇武興起急務度外にして何ぞ滿 朝互に嫌疑を生し區々閱牆に遷延被致候にや只恐らくは眞に宇内形勢を知る人あらん必管間井底の見而已ならん今日之事如何に存候にも只々其人にあり其人存し其道生すへし申述候通り早勝林西郷杯斷然舉用せらるゝの道は無之哉此外天下人傑御承知之分も候は、内示頼入候御噂西洋風聞とか右一紙何卒、借用申度候不苦候は、此者へ御渡し頼度候予熟考致候中にも長州始終之義是非々々貴藩中立天幕共に直奏公平に落着に可至様無之ゝは如何にも遺憾且今後之處深遠慮致所に候右等斷然貴藩に可被命様誰か心付候者無之哉今日之形容爰に至ては必可成の筋也此事元々貴藩に於る懸念も有間敷若又可被申出様も無之候得共頗殘懷此事に候也能々御思慮有之度候扱又迂策云々鈍筆

立試候處面上短舌に任せ申候様には參り難く且理屈の屈極而已に成行とふも公平たる所に出來不申恐縮慚愧の至に候得とも匆卒の儘書認一兩日の中可差出候何分にも基本を貴藩に取り而て後執行の事に無之候ゝは皇威を海外に光輝し朝權更張の所に難至は勿論に候此異見は壬戌來斷然不動着目の所に候條本藩要路方々の所氷解無之ゝは所詮萬々難被行候尤空論申而已にゝは無之千一若し合意給候は、臣聊か可成の策あらんとす只々柱石の貴藩に容られすんは盡力も亦是迄也何卒此上兄弟周旋更に懇祈候依之先日一帖差出候如何の物か小松氏始評論承度結文策略須考の所は前文之通に候不日可入貴覽候

二月八日

一二九 岩倉具視書翰「井上石見宛」慶應三年二月十七日

追日春暖候彌御壯健欣然候扱兼御嘶し申入置候件々愚蒙實に愧縮此事

に候得共鈍筆立試候何卒是計り之事には被爲至度懇祈之事に候過日一帖御本藩御議論如何哉有様御示頼存候尙又此分も早々御廻しに可否十分討論高論に預り度其上眞に清書深く勘考仕度存意に候大綱相違に可否十分可恐の事亦多端に涉り如何との次第も有之候は、夫々打付に入墨頼存候宜敷々々御取計分御頼申入候○此頃更に異人來集新將軍下坂之趣如何之事柄に哉定而兵庫開港之事哉と存候此間は六さと唐紙所望氣毒に候屏風張交用に候間實に十四五枚に十分候得とも眞の古唐紙ならば十分と御頼申試候事に候○隅州殿御上京の事は彌來月中旬と申事に哉乍序承度候○御噂西洋風聞書何卒々々借用申度存候仍早々如此候也

二月十七日

對

大人

内披

一三〇 岩倉具視書翰岩倉具視同 具定宛 慶應三年二月廿八日

過日内示中大兩卿殘りの砌は一通り御請申上候後出仕而して出仕同列申合兩卿の事可被申立所存之旨此事所置方如何有ん元來徒黨の所以を以て罰せられ候邊に關係すへし尙又門流差置所置候ても元々御沙汰に齟齬旁自分々々所存の方の可申入か書取杯にて申立候ては尤不可然にや但し出仕候上兩卿差次北小路高倉高野等は所意可申事と存候右は前以る何事も申合の上ならては一分所置致間敷約定貫通せずては不濟事也依之北小路高倉高野等の申口假令は

今度諫奏の事元々大卿中卿鼓舞亦強て説得徒黨と申類には決して無之世態實に不容易事共紛々將に
釐下いか様の珍事出來も難計晨昏不堪苦心如何被爲在可然と 君上の義偏に苦心の底意不計同意不顧萬死龍眼をおかし直言仕候事のみ外更に意なし然るに同時同答の中二人被殘候事何共遺憾殊にかゝる御大變

の折柄は尋常にてても大赦に有へき次第の所同罪の者彼此區別の事元より被爲在間敷筈に候一は御明分にも關係候事亦萬々進退共々にと契約の約にも齟齬亦朋友の信も如何と耻縮仕候義に付此儘自分出仕さえ有之候はよしと傍觀は致かね候然りとて御一同連署又列參等の次第は忽ち御咎の廉に背き候譯也賢慮如何候哉臣等は幸一族六久有之候事右の中は十分存意申述歎願の心得には是は一分々々門流とか役人とかえ歎願の外不可有にや而して中大兩卿の所別事仔細有之不被免事に候得は無致方若し同事に候へとも何分若年の輩鼓舞徒黨の故と申事に候へは小子等に於ては決して右様に無之候間何卒々々御辨解候て御氷解早々被免候様可申立處同事と雖とも何分高官老年の兩人夫れ丈の御咎め可有之との押切の返答候得は又々勘辨可致と存候右は心得候旨出仕第一第二三の卿え相談如何と存候

出仕の上六久兩卿は申立は翌日にてもに候得とも出仕中同第一より三位

迄の所又參り合せ同志の人には右申試置候事即日可然哉無左候亦は小子相續の上の様相成候ては實に其兩人折角信義も空敷可相成と存候亦大久兩卿の所は小子出會の上申取方示談可致事と存候風と心付候次第申入候早々以上

二月廿八日

今日井上は尋に遣候此間かの文通は決して出仕邊の事不尋建白ヶ條の云々

示談丈の事に候右返書にて必成否可相分候多分不日と存候得共若しなかくと申事に候は尤夫迄之事決て可歎事に無之候元來戊午年か廿二ヶ卿立派なる諫奏の所置方も無之事元か不願萬死決心申立候事現に大權おもてを向ふ者も無之尹宮御退役御籠居に至り候程の大功も有之候事豈兩三年籠居を可屈にや益斷然大丈夫必御奉公可申の時可有之事と御天下の事は實に是より始り可申事に候何れも能々心得には候得共

念のため申入候區々の議論は頓とく止がよし
公卿中の妬心の甚き婦人閨門語のみ歎息々々熟慮候へは元々互に同門
同流の輩にて其時に當り高官卑官重職輕輩と云のみ然るを何の宮は云
々此公は云々彼卿は云々と漫りに誹謗遠國足輕と雖も勤王と聞けは
朝廷大事吐露候事實に如何也第一 君の御不明を顯し第二朝政の誹を
舉第三同門同流を陥れ候事皆以吾耻也宜
朝廷丈にても戮力 皇威を光暉し度もの也一人欠れは一人丈の弱み也
此邊の事頻りに辨開論を立んと欲す御心得置可給候也

侍 從 殿

大 夫 殿

對

一三一 岩倉具視書翰「岩倉具綱同 具定宛」慶應三年二月三十日

廿九日兩所を報書忝一見的用のみ及答書候

- 一 玉松快晴次第出頭の旨に候得共衣體都合も有之候間五六日中延引申入候事に候同人義に付來示の旨は何も承候
- 一 増歸京無事の旨亦入念來示何も承候
- 一 中卿往反并一昨日密々申入候件に何も分明の旨安心候
- 一 書簡往反の事に付云々申入候所得と被心得候旨是は實に大切の次第口述の分は兎角可相成候得共手跡計は直證疑もなきもの吳々懸念御自分の外迎も心付頼入候
- 一 櫻井士の事噂に候得共是は出頭不致方可然存候所兩人にもどふか山林幽居世事不通覺悟やと被察候
- 一 井上返書眼目の所内々申入候

○予建白草稿同意頗る感尤小士大士并兄弟同行の由也乍去今少し得と勘考四五日中否可申上との事但し此建言一帖の事決て他洩無用御父子御三人限りと申越候定て所存も可有之被存候右に付爲念申

入候御兩人の所は申迄なく候得共尙又靖翁はかねて願置候事に候得とも彌以御莫言の事願上候と吳々申上頼候亦小原にも無助才候得とも右始終得と御申入置可給候

○西郷俄に上京二三日の中着の由なり其上早々隅州上京次第否内々申上との事に候

○廿二卿の事かねる約定も候事に付よほと辛抱仕居候得共餘りの延引堪兼昨午後小松士原一は出頭候明日には可分候得とも是も西郷話と一所に申上候との事也

○乍内々此頃神道復古の事に付彼是關係日に取紛れ居との事也

右荒涼申入候尤凡て莫言但し小原の所は此書狀の儘内々入一覽候よよろしく候尙四五日中井來示次第早々可申入候

一小原え申入置候書籍二組今日御廻し頼候同人昨日登北候未出頭なくは尙出頭次第御承知所置頼候

早々如此候也

二月三十日

對

侍 殿

大 殿

一三二 中御門經之書翰 〔岩倉具視宛〕 慶應三年三月一日

不正之時令候處彌御安全珍重存候借過日來御周旋候廿二人之輩先月中旬可被免哉之處何之御沙汰も無之又二十日比哉之旨是も御不沙汰又觸穢明哉之旨又候何等之沙汰も無之如何之事哉と存候右に付過日來も情思慮仕候處幕が薩心底相さくり候積りに表はは屈服之様に申居内々之義も申聞薩が心底打出候様之仕掛計に眞實幕府折合候に無之哉と存候左なく候ては中旬必可被免之處只今に何之沙汰も無之筈はなくと存候必竟幕之謀計に陥入候事には無之候哉と存候又只兩役之不承服計之事に候は

何とか隅公にも御勘考可有之義ケ様に延々には不相成事と存候併廿二人は是非不免と申人も有之趣に候間何そ役人中左様之咄有之候事哉いかと存候既に昨秋關尹已下天誅可加催も有之候へ共左様之義は却る朝儀不相立事と御申に堅御制止に相成候事に候得共古語にも先時は人を制し後時は人に制せらると申候通り則彼奸臣に被制只今之姿に立至り實に殘懷且遺憾不少候昨秋天誅相行候は、舊冬已來之御不都合は有間敷義ケ様に段々御不明相重候は實に千載之汚名 朝威益不相立小義をいたき大義を失ふ場合哉と存し候彌兩役關尹杯之所意に候は、最早小義は打捨早行天誅 朝威煥乎と相立候様大義を立候方至當之場合哉と存候一日之安に居る百年之患を殘之譯に只今一日事遅引仕候義は向に有は三十日四十日之後れに可相成は必然候間何卒一日も早く被免大隅守上京無之候は俗に取戻し之ならぬ様に相成候は、千悔も無詮哉と存候何卒此處は格別に御勘考出格之計策に無之候は

皇國滅亡に可立至哉と日々苦心仕候幕も右申上候通り表向丈打解内實は薩之心さくり候積りに有は無之哉自然左様之譯に候は、俗にこゝ迄ござれにて被免候義は有間敷存候其内幕之勝手之事夫々所置仕候は終夷人參

内も難計右様之義出來候は、又々大擾亂可生實に國家之安危不容易時勢と存候へは實に安座も難仕憂苦之至に候一段干戈相動候は、夫は、大變實に夷賊之術中に可陷義何分早く隅州上京諸役人取替二公退役無之候ては迎も天下治平に難至と存候乍去申上候通り幕實意に有無之候は、被免候期は有間敷終に新アメリカと相成候義實に歎ケ敷事に候間小義は打捨極意 皇國之御爲筋立様致さねはならぬ事と存候尤に種々御勘考有之急度御良策可有之候へ共彼小義に御なすみと存候間最早左様之場合に有も無之哉と愚存打明申入候併此比急度被免候御心組も候は、無異に有大に重疊之事に候へ共過日來様子に有は迎不被免哉存候に付先々申入候深

御賢考何分にも
朝威被爲立 皇國一和之様致度懇願に候何も宜願入候今は任幸便荒々申
入候早々頓首

三一

實々秘中之秘御一覽御火中願入候

行天誅候義決々々好事には無之候へ共不得止場合古語にも君之傍之惡
を除と申事も有之最早當時之模様にも替天行大典之場合哉と存候間何
も打明申入候事に候深御賢考小義にかゝはり大義を破さる様之御所置
所仰候決極 皇國治平萬民一和之處肝要と存候尹宮出仕に付人氣大に
惡き由に候扱々困入候事に候也

北山人

和翁

内啓

一三三 岩倉具視書翰千種有文宛 慶應三年三月二日

觀大人

對

机下

拜承御方御細書も夫々拜見候乍例的用而已御請申上候

一薩の過日往反の所廿二卿開閉之事斷然幕受合之事故今日迄辛抱罷在候
得共餘り音なく堪兼今日小松士原士の罷出候趣に候今日は分り兼候得
共四五日中此方より否内々可申上との事尤助才なく盡力の件々有之候
旨之事

一同時西郷俄に上京四五日中着左候は、隅州上京も決着之所分明の趣に
候其上前事も返答との事に候

右に付未否不申上事に候尙分り次第早々可申上候如命開閉なくは隅州
上京無之決義も承り居候山宮も有之決助才無之事と被存候
一圓公萬端尋常之通りと廿七日被 仰出候是は先宜敷と存候

右久卿始こてくなし開閉の義薩幕にも周旋やと被存候一秘事承候然
る所其事圓公え對しても必出來ぬ譯に付此邊の事も出來にや併何分廿
二卿共にこてくなしに被免と申邊とふも彼是と被存候事に候併免
も角不遠事と小子には今百日前後と存候而已何も子細も無之存候
一四辻殿事扱々氣毒々々御趣意も一段の事拜承に不堪事に候
一准印御違例眞に段々御快方に候元來子細ある御所勞らしく被存候件に
も有之候

一新三郎歸村仕候併法體仕居候大に見違候ものに候

一此頃幕府にて又々伐長論をこり候趣に候定て虚説と存居候得とも實事
らしき所も有之候全く佛夷援兵頼候事やに被存候此有無により形勢又
々大に一變と存候

一神道復古 神祇官出來候由扱くく恐悅の事に候全く吉田家仕合に
候實は委く薩人盡力の由に候

種々御苦心御尤々々昨日中卿よりも粗御方御同様噂も懇々承り候小
子には甚如何に候得とも天下の事はより始り候次第三十日五十日出
仕遅速に係る様の形勢にてなく昨冬より當春と勢ひ大一變候最早區
々枝流の事論すへからず只々皇國大になす有るの所日夜的目を立
候事に候是は拜面ならては難申上只小子所存荒涼言上候如此候也

三月二日

此書狀段々莫言約定承り候秘事も書取候事全尊公故申上候得とも御方
の御廻し扱にて間違出來候ても大苦心候間今日は御一覽此者へ御返し
希上候

吳々も此書狀此ものへ申下度存候

一三四 井上石見書翰「岩倉具視宛」慶應三年三月七日
乍恐拜答

一 小松原へ出會仕候處岩倉公其外二十二卿邊之事 朝廷御評議六ヶ敷昨今に運兼込入候旨申居小松にも様々申込候上尙邸中内府公邊へ差迫り可申上候間是非共近日中に御幽閉被爲候様相談に及候由乍然邸中の論も再往之評議に近々大隅守上京之事に候得共其上一緒に致度との事に決着仕候

一 西郷は土州宇和島へ國許を差出候由今頃歸國仕候事歟と申事に御座候

一 御書取は先度申上候通大體之御趣意誠に感伏候事と承申候私には尙更別段申上候廉更に無御座候乍然于今愚見方々有之候故取寄返上仕候様致度何れにも永々打置候儀恐入奉存候十日比迄には得參殿難仕其後に奉伺候様可仕候

一 神道復古と迄は至り兼候得共追々祭政一致之處に不參候は無詮事と存候神祇官を被置諸官上之儀に候得は此事よりして 朝政之御改革も可被爲在御事と乍不及奉存候

一 矢張伐長之舉有との一説更に承不申會紀州などは其説とは相聞へ申候乍然最早被行候事は有之間敷候

一 兵庫を堺浦に轉し開港之譯も存候不申參 朝之儀は申立候事と愚察仕候得共彌々様と申事も承知不仕候右早卒に書取不敬之罪恐入存候尙參殿之上可奉拜論候恐々謹言

三月七日

長 秋

上

大隅守上京は無別儀決定候由相分り申候着は先づ當月中と申事に御座候

○ 今度

朝廷之新令

近來國家多事何となく人心も不穩に付 先朝段々御配慮被爲遊候半不存寄 登退恐入候事に付は 新帝御幼君に被爲渡候得は上下一和一團專

輔弼之力を可竭之秋候愈以公義を存し私心を去り大典を守り綱紀を張て
國家を維持し萬民昇平の徳化に浴候様厚申談可勤仕事

一 國事御用掛一同無隔意申談し精勤可有之候事

但 國事御用猥に不可口外

一 官家之向建言之義は總て兩役之中へ可差出候事

尤何によらず致建言候は參考之爲に候條厚く心を用至當明亮之理を
專要に可申出我意主張之所爲有之間敷事

一 武家建白之義は惣て經其筋武傳へ可差出事

但 役外者周旋致間敷事

一 武傳を兼り達し置候通親族は格別其他諸藩士猥に面會不可有候事

一 御爲筋申立確證有之情實辨明之義は格別其余姓名不慥或藩杯と唱浮説
造言且狐疑に類し候義は不可採用事

一 兼り被仰出之名分急度可相正事

一 正義御決定之後異論申立間敷事

一 外夷之義兼り被仰出も有之候得共一昨年十月尙又御熟慮之上 勅許に
相成御國威は屹度相立候様との 思食右邊心得違不可有之事

一 何分申立候共不直胡亂等之筋斷然 (以下斷缺)

一三五 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年三月八日

御示之通り寒暖不定に候處御揃御安全珍重に存候抑過日愚存打明け言上
に付御細示何も承り候此頃一向何も不承候處件々御示畏入存候尙又井印
御面會之上何も御示給り候旨畏存候尙宜願入候實に一身之儀は決り頓着
不仕長にも鬱悶は不仕候得共日々 朝議御不明而已相重是而已歎息仕候
事に候何卒早く隅州上京之程待入候

薩長航海大攘夷決定之旨夫は、恐悦此事に候何卒程克計策打合 皇國
の汚辱相清候様祈念候夷人參朝難拒勢之旨何共、無申條悲歎之至に候

何卒、是は不遂様仕度存候隅州早々上京相拒み候様仕度存候事に候
神祇官之事恐悦に候

形勢追々變轉小勇輕舉は害而已益なく大に活眼を開き候る心掛肝要との
旨畏り承候如何心得に可宜敷候哉大に着眼之處は攘夷之件に候哉又模様
に寄り國內争戰にも可至哉との事歟兩様之内と存候又々心得方御教示伏
る願入候先右兩様之内哉と存候得共夫に付るは又々心得方荒々承知仕度
何形勢之處御見込御教示奉仰候

内女房之事如何と存候御百ヶ日は御引上げ之旨に候間當月中と存候左候
得は一向間も無之事に候過日も申上候通り迎も歎願仕候共不被行儀と決
着仕候に付夫儘に打過候出仕も候は、又々勸考可仕候得共幽閉之儀は迎
も、力不及候又 朝議御不明を正し候譯に可夫々所置致候儀に候譬御
百ヶ日後にても不遲事と存候間何分にも隅州上京何か御失體相改候節一
緒に改正相成候は、如何と存候先任幸便愚存申上候何ぞ宜御勸考も候は

は御示教願上候先愚存荒々言上仕候

右荒々御答御願旁申上候尙萬端宜く、願入候御心切御示畏入存候夫に
付付上り又々願上候間何も宜く御心添願上候去秋一身を爲 國家なけう
ち建言仕候事に候得共此上飽迄も爲 國家忠實貫徹仕候様致度存念に候
間宜く願入候先は早々不一

三月八日

花の哥感心仕候

北 岳 大 人

内啓

和 翁

一三六 井上石見書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年三月十五日

昨日は尊書難有拜讀仕候十九日早天山端之様參向可仕御書取之三冊は其
砌持參委細言上可仕候拜答迄草々如此御座候誠恐誠惶謹言

三月十五日

長 秋

上

二白幕府より兵庫開港之願書傳奏の差出しに相成候由一大事件之場合何卒大隅守にも當月中上京相成候様有之度折角相待申居候疾に御建言の趣も可被爲有之處何れと評議仕候内右式願書差出し候故最早可然御手寄を以て御建言可被成哉宮内杯申上候にて大隅守上京の上との愚案に御座候得共御書取之御趣意には感伏仕異存申上候次第無御座候故思食次第此節如何様共御決着可被爲在哉奉伺候敬白

一三七 岩倉具視書翰〔中山忠能宛〕慶應三年三月廿二日

尙申上候籠居之上本文之仕合實に何事も不承候防長事件も爲差事も無之哉一兩日には小笠原歸坂退役に可相成とやら其外種々風聞は候得とも例之虚説而已と存候薩にも多人數引取候様子も如何之

譯に哉頓と、方角不立申形勢に候當月五日一印には宇治邊遠近會印には叡岳要害小道、上杉には大津草津邊右三士各其主人微行小人数に一宿掛細かに吟味之由是は何等之爲に哉尤無相違實論に候いつしかには鸞輿奉替之義も可有之見込之用心哉不案至極之時節に候得とも表向は何か追々御靜謐と申事之由兎にも角にも種々苦心不堪切齒事に候小子も今日迄此上之事なく來候儘昨冬事も先々無事相濟事哉と存候夫は、不油斷事に候早々以上

春暖候彌御清榮恐悅候誠に其後は御跡遠候拙子も同様意外御無音打過候義は決る無之殊に彼是御内話申伺度事件も有之候處不計も舊冬一族議卿より被示候には薩藩其外藩士出入甚以不慎之風聞不少如何之心得に哉嚴重慎み可申候其門室家來にも以來は面會無之様被申越候に付早々内外取調候處存外之嫌疑段々言上之方も有之扱々案外之次第共有之なか、由斷不相成譯に付早々、切出入斷門室家來に至るまで、斷絶罷在候仕合

右故山中^(欠) 逸にも來會無之乍去右子細^(欠) 渡申上置度同人迄早々頼入候處
遠方遊行歸村後と申吳候處引續下坂此比歸村參上哉と存候今日幸ひ便宜
有之清^ア逸迄此一書狀頼候事に候尤不待貴答右言上まで如此候也

三月廿二日

對 岳

子 固 大 君

内啓

一三八 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年三月廿二日

不揃の時かふ彌御揃恐悦存候抑此間妻參上種々御世話に相成拜領物等御
世話く恐入存候厚御禮申上度候歸之節も佳魚御惠投日々拜領格別之高
味深く恐入畏入存候萬々御禮申上候
一種々御心切御噂之趣何も畏承候尙又宜々願入置候
一十八日酒井入來候也

堂上投書之事

隅州上京之事

航海論之事

兵庫開港之事

右等申居候

右投書之事杯一向不承不都合之事に候酒井之外一同入來人も無之家僕
共にも世事心掛候者一人も無之何も不承候は大に困入候事に候時勢
熟察仕度候へ共酒井も御噂之邊には此後世評不詳事と存候間彌困入
候事に候外に差支無之人體に時勢熟察之人は無之候哉何卒御勘考願
入置候

一兩人計差支無之人體世話致候哉之事御噂之旨當時實に大事の場合と存
候間左様之人有之候は、大に都合宜と存候間隨分世話仕候心得に候へ
共凡世話に付何程之心積に宜候哉第一肝要之義伺試候食物丈之事に
候か又着用物丈に候か又悉皆世話に候哉其程々月に何程と申邊一應伺
度候力及候事に候は、兩人計御引受世話致候哉と存候間此段伺候何分

ケ様之時節時勢に關候は進退難仕成丈時勢承知仕度候間此義申伺候
譬正議確然之勇士に候共時勢周旋不出來之者に候は世話も無詮と存
候其邊も承知仕度彌世話仕候義に候は、當人由來も得と御示願入置候
何も乍御面儀申伺候當家へ常勤出來候者に候は、尙更都合と存候へ共
左様之人體は無之哉と存候何も御示故願入候世話有無に拘らす差支無
之人入來何か承候へは大に宜と存候追々諸藩にも上京之折柄尙以時情
明瞭に承知仕度候間此段も申願入候

一二公家來山中參上之旨何様之次第に候哉不苦候は、凡之處御示願入度
候

吳々御面働恐入候へ共何も宜く願入候扱々追々時勢切迫之處二公始
存意實に可悲可惡可笑又無論か悉皆盲聾之人同様之次第に候伏三實に
可惡事に候大罪同上と存候

過日愚息御番に承候處伏豊此頃頻りに往來哉之旨に候間定る内公御

變心も彼人之説に御迷惑之義と存候扱々々々内公御心底不定之事可
歎事に候ケ様之人社世を亂之賊人と可申歎實に長息之至に候何卒諸藩
上京程克治り候様祈願に候へ共先々十に八九分六ケ敷哉と實に心痛之
事に候何も宜々御策略奉祈候萬々出仕拜上可申伺候へ共何分宜々願上
置候先右申入度早々不乙

三 廿二

追而此鮮一桶紀安藤に到來候に付進入仕候御笑納可給候也

三白堂上投書御手入候は、拜見願度候也

北 山 大 人

和 老

机下 極内々

一三九 中御門經之書翰

岩倉具視宛

慶應三年三月廿九日

口上

岩倉具視關係文書第三 (慶應三年三月)

三百十九

御細答畏拜見候

一大久事御心切畏承候

一只今堀新三位入來閉門被

免候畏入候尤廿二人且正三等も同様被免候且過日本番所參勤之輩今日

再□之旨に候可被申上候

一戊年御方々にも被 免候哉之趣に候早々申入候併慥に其邊と申位之事

は不分候早々不乙

三 廿九

和 翁

御 答

内々

一四〇 岩倉具視書翰「大久保市藏宛」慶應三年三月廿九日

大久保市藏殿

對 岳

受

一金三百圓并帳面

右正に令落手候事

一秘書一通懇々示諭忝草卒一覽中にも事々肺肝に銘し申候愚昧相應力之

限り出頭盡し可申候

一小松書狀は是々披見と存候

右御請入手迄如此候也

三月廿九日

一四一 岩倉具視書翰「岩倉具綱宛」慶應三年四月五日

昨夜來暴風雨存外之事に候御本殿格別御替りも無之哉宜敷御申上可給候

○昨日之來狀并昇造何も御申越之所承候何か彼是御配慮萬事都合に忝候

○嘉義參宿始め凡る無滞相濟候旨誠に以安心之事に候小番直は是か一通り相濟候事に存候此上番代迎免も角もよろしく頼候嘉義肴物誠輕少持參之物に候所態々取分候御越心入實に喜悅芽出度祝盃候事に候

○世話梅溪送り物之事承り候當時之御振合候事可然様御取計可給候尤昨日相濟候旨安心候

○明日樹下入門芽出度存候何れにも随分出精專一に存候當時は國學殊に至重大夫之所も十分心付頼候學院參入之事も精々早々取計頼候かねる當人にも申入置候通り少しも懈怠なく參入之様御申聞可給候

○扱調進一件吳々も重疊之事是に頼とやくのがれ安心此上なく喜悅之事に候右に付昨日昇る御申越能々御心付之事に候元々塵を結んでも志丈之義は致度存候かの拾五名宛十年も出し候事に存候得は一年分出し候もよろしく乍去元々難澁之事は承知之人々に候間折角心入候も過分之事は却あしく右に付六卿へ面會に打明べたもたれにかねる

はケ様と迄覺悟之事に付餘程之御禮申上候も畏り安心之所はあき不足事に候得共念の過き候も如何と存候如何之事可然御相談頼可然候尤六久之所は別段何も不被申入只々殿下武兩卿之所に候扱又昨夕木市來り段々難有是に一類立行是より何賣買とも取付急渡安心方角立貫候由落涙に申候是迄度々之不足申上候も恐入候義後悔之旨乍去ケ様に速に可參とは夢に不奉存偏に五ヶ年來北野様日參は冥慮と申夫は色々難有候申出候是に實に安心無申條存候扱雜費之向は夫々借財方返入にも可相成候得共御代料之分は私眞に調進御肴料而已是に取續き方可致候得共三ヶ一はなき物と存候も結構之事に候間木ヤ市兵衛と乍町人私名前御所向様に出候殿方様にも御心配相成候事故關白様方とも御初御禮仕候宜敷方々様御差圖次第可仕と申候に付是は以之外之心得に候元來御用に相成候御品に付如此入込年數も立來候事に候得共上御物之譯を以被出候事に候且又町人木

屋難澁申上候に付旁被下候代金に付御所御金銀に重き次第に付於今
度は難魚一疋申受るは其方より當家 御所向御役人中方々にも不相濟
候事に候夫故昨日采女昇いも得とく申聞遣候事に繰返し申聞候漸に
合點參り候様子に候得共若しく何を持參候も以來は決るく受取
候事も無之候様存候此所が手離れ之大事く之義に候尙又早速不取敢
御禮との事にお鯛鯖持參候に付同斷斷り候得共暖氣遠方無致方との事
に付則早々昨夕申入候通り半分家君御始采女迄遣候様申入候仔細不申
入ふしんと存候右に付今朝只今段々斷に付無據止申候困り入候事に候
木綿壹反挨拶として遣し候吳々も今度之所實に嚴重申聞候乍去當人度
々出入之事故成田河村は心次第何成とも遣し可然申置候此方にも又此
方丈之心得可致申置候右成とも入費爲致吳候様申候に付再び右様之事
申候得は以來出入斷と申置候其替り以來此事に付弟にもあれ町の内に
もあれ未だ難澁掛り居候事抔と申候事決して無之是限りと申置候只々

町内并借財方夫々異亂無之候様追々被出候次第ひひき沙汰なくと申入
置候今日本殿へも參候旨に付何れ右御金銀采女昇造立合にお渡し候様
申置候其砌落手書虫喰□□少々趣意申置候事に候今般之次第も六卿へ得と
被申入實に心計之御禮申度可被申入候様頼入候
○今朝昇早々同伴出京之心得之所入谷痘瘡人どふも不工合無據延刻に及
候哉難計午か午半迄不參候へは采女壹人にに御渡し可給候尤當人一應
行取印形取にかへり候由に付午頃ならでは得不參事と存候元服返し向
に八日九日頃の心得に候何も采女招き寄せ候心得に候
○右荒々書とめ申入候時宜にお昇不參も難計如此候也

四月五日

對

侍 從 殿

此方が成多河村へは染筆もの可然存候也

一四二 岩倉具視書翰「堀小太郎宛」慶應三年四月八日

一書草略令啓達候熟ら往事を回顧候得は抑 朝威之光輝に至り候事全く
貴國の忠憤勤勞に有之而已亦卿等之盡力豈に少きに居らんや然るに足下
不幸にして退避被致候趣時未到止を得ざる所なり博浪椎成らす姓名を變
て下邳に避く時に乘して忠志を達す素より豪傑之欲する所歟拙子にも昔
時晨昏俱に苦慮屢々高論に預り微忠敬 奏盡力致し 朝廷之事萬々御挽
回は此時にこそあれと分上の限りは苦心勵勤罷在候處不圖も嚴重貶黜被
仰付落飾之上洛中住居も被止恐怖實に此に極り爾來北山之田里に閉蟄凡
そは隔絶沈淪不得而會事既に數年實に一日三秋の思あり然るに今度始
聊開明之道に至り寛仁之御沙汰蒙り候事宿昔之至誠皇天未た之を捨て給
すやと不堪感喜尤拙一身之窮達は姑く捨て不足論山階宮始め二十二卿之
忠志明徹に至り候儀朝家之大幸也是れ畢竟他なし偏に貴藩の力而已拙微
忠に於ても獨り能く藤井子井上子兄弟の知る所にして今度之道に運ひ候

も素より由來有之實に幸此事に候也足下彌御壯健頃日御上京之趣傳聞欣
躍之至り日夜不堪渴望候上京之上は定る天下之急務多忙必然之事と被推
察候得共冀くは渴望之微志愛憐を給り速に出會を得しめられ候は、本懷
此事に候拙私情のみを以て斯く言には無之宇内形勢眞に不容易 天朝之
爲め其偉略高論に預り度旁之事に候戀々之情に難耐愚札被進達候心事申
述度儀山岳候得共難盡筆端尙萬端面上可申承候早々不備

四月八日

入道 友山

堀 小太郎殿

尙往事を願れば落乎として世を隔るか如し何卒志願之通り出會給り
候は、如何計か忝存候當月々は月中丁度歸洛被免候に付遠馬不及御
苦勞御約日本宅に御待受可申存候以上

一四三 岩倉具視書翰「松尾但馬宛」慶應三年四月十日

華牘欣讀抑舊冬云々懇々來命御悲歎之條御至情令忠察候實に天折地崩不知云ふ所萬々難盡筆端御同様不堪悲儀に候先以彌御壯健併頃日腫物御困り之旨いか程の事に哉尙承度定而酒肉之禁忌專務と存候寔に早春は御出仕恐悅萬々豈御分上之義而已ならんや

天朝之大幸如何んそ之に如ん以往益御勵勤多年の忠志眞に御貫通は勿論也將に力を致さるゝの時機に可有之と欣躍仕候臣にも今度寛大御沙汰を蒙り如來示開明之道に運び候宿昔の微忠 皇天未た之を捨給すや感喜比するに物なし爰に至り候義素り由來あり獨り足下隨而九成士の知る所有る之他なし頻年辨明せられしに非すし何ぞ深情一身に溢れり鴻恩いつの時か可報に哉必忘却申間敷候臣壬戌貶黜被仰付候は北山田里に閉蟄已に數年に涉れり熟々往事を回顧候得は茫乎とし而世を隔るか如し申述度義心事千萬候得とも如何んそ紙上に盡すを得ん縷々可期面上早々不備

四月十日

入道 友山

と云 雲大人

不待貴答也

尙々吳々も能こそ音問本懐不過之尙不相變御同意御依頼申候○別紙眞事に哉奇々妙々右に而は眞實二公御心腹も更に不可伺所有之感戴此事に候方今幕申立件々實に不臣之所業餘り之事に而虚談とも存候程也返すく別紙文面如何必々抔度外之臣にも滿腹之恐悅候○土州上京延引如何之趣意に哉種々高論も蒙りたく不苦候は、藤井士入來に可相成様内々御取計之事出來申間敷哉よろしく御頼申候勿々以上

一四四 岩倉具視書翰案

井上石見宛 慶應三年四月十四日

四月十四日

井上一過日愚孫御面倒氣毒扱隅州にも十二日京著先以令欣躍候將かねる御内談申入候拙論建言一帖彌御計に而御主人御一覽可相成哉亦是時勢之模

岩倉具視關係文書第三 (慶應三年四月)

三百二十九

様も有之所詮無用の物に哉如何御内談申入候尤即今之所天下の急務多
端御閑日も有之間敷遠察候得とも若し御心配なく御取計出來候は、一
兩日之中可差出其砌はよろしく頼存候

一堀士々々一書御面倒申入候上京無之候は、必御通達に不及御投火可給
候

一舍兄一應歸國保養之由殘心此事に候併暫時に亦又々上京之旨喜悅候別
段書狀不差出よろしく傳聲祈耳

一億兆衆庶頻年渴望貴國今度御上京之事

朝家大幸不過之然れ共君臣共に實々不容易御苦慮と千萬恐察候且爰に
至道路之風聞一説あり幕薩兼々合體兩家の豪傑度々密會彼是の旨傳承
例之空論尤齒牙に不可懸候得とも各望の事素々求る不可得折角破竹之
勢若し一小事之ために故障有んの時遺憾の大なる者也但實事に候は、
必幕公平正論に歸したるか又貴國深謀遠慮に出るの他なし

一四五 香川敬三書翰

岩倉具視宛

慶應三年四月廿六日

大急き言上今日御本殿へ參上仕候

今日四ツ時井上石見方へ用事有之罷出候處過日

閣下へ御遣しに相成候御存意書隅州へ早速差出拜見仕候趣然るに十七日
廿日迄の内に薩藩にあらざる他藩の士西郷吉之助方へ參候亦他藩の士
より西郷に語て曰此頃承り候處岩倉前中將卿國事之儀に付御存意有之由
に付書取を以て大隅守君へ差出候趣承候定る吉之助子は承知之事と存候
彼卿には云々之評も有之未た天下之人疑惑致候折柄書取等御受到相成候
は、不宜旨申述候處西吉曰夫は始めて承候左様之事有之候得は私も承り
可申に未た何とも存不申夫は浮説と被思候由答候處他人曰是は浮説には
無之眞に確説に御座候と云て他人歸る依亦西吉不審に存し候處へ井上參
り候間幸に西吉之に尋て曰過日云々之次第有之候由井上子には承知にや

被申候に付井上曰實は先日云々之次第に實は書取大隅守君へ差出置候
是は實に密事に候處如何して他藩此事を知り居候哉甚不審其他藩之姓名
は誰と申者に候やと尋候處西吉曰其名は申兼候と云て更に不言井上曰此
事件は貴子西郷にも談示可申と存居候折柄に候尤秘密之事件故北山公も御泄
し之儀は無之筈是は如何之事にやと井上愕然致候趣併し不得止引取之趣
其跡に西吉早速隅州へ其趣申出候様子に其後甚不都合にて昨日井上
隅州方へ罷出候處右書取下げに相成候趣其節隅州曰御書取之趣逐一拜見
之處誠に御苦心能々大勢御看破感服仕候と被申候然るに又曰御論之儀は
御尤に候得共此大事を

朝廷に御採用は餘程六ヶ敷被存候此儀を先内々に石見之手を拜見候
事故其方々よきに御挨拶可申上候旨申聞に相成候趣何となく不都合と申
居候西吉を委細御承知候様子に何となく言語面白からすと申居候夫を
強る此御存意書を表向きに相成候時は御助け被成候哉と尋出度は十分な

れども其時此儀に付ては此御輕卒なる事ありと被申候時は一言も無之儀
故強不穿引取之よし此儀何人に御咄相成候哉と井上大に心痛致居候西
吉も他藩を咄に相成候事故是も亦其輕卒を思ひ居候趣其上先入主となり
の勢に西吉も余程疑居候口氣に相見へ申候由甚遺憾之趣申居候此儀井
上を申上候者歟と案じ居候處幸ひ小生へ入來私共言上致吳候様申居候
間右承候大略恐入候得共嫌疑中故不得止以書中言上仕候宣布御探索被爲
在候様井上も奉願上候

一 天下之事何も變り候事も無之候昨日も勅使鷲尾へ御出に草莽等之
儀御尋に相成候由敦賀開港之儀大樹を許に相成候趣に過日「英夷サトウ」
と申夷敦賀へ渡海に相成候趣きは右サトウを直に承り候由右は藝州藩
面會之由陸地を参りて夷人は敦賀に一宿之處彼地武田之殘兵共憤激之趣
に付危き由を以て早速に引返し申候猶以幕大不都合之様子なり
一 過日伏原卿へ來翰有之御引に相成候大恐縮之趣に御座候

土州二男兵之助は昨日とか上着之由容堂は今日國元出帆之由

四月廿六日

彦 拜上

言 上

御側 中

大亂筆御仁免可被下様奉願候

一四六 岩倉具視書翰案「正親町三條實愛宛」 慶應三年五月朔日

過日は卒爾に呈書候處速に御入手殊に御報に安念畏候大原之所如何參上便宜も無之哉左候は、尤其儘御返却可給同卿は先差控可申候扱一帖一書旨趣其大意定御不審廉々不少存候得共何分鈍筆盡すを得す乍去只微忠を述る而已 但し一帖の方は攘夷正義家に大嫌疑一書の方は幕府徒に大嫌疑共に不容易件々而已に候間必極秘之所吳々御含冀候將臣姦名不解候事尙氷(欠) 之如し獨り尊公之高崎士へ被辨候所中卿之或草莽士に被解候

廉眞に舊好不被爲捨所御厚情之程肺肝に透徹感戴仕候事に候乍去薩始め尙十に八九容るものなし如何之申條に候得共必再ひ 朝に立不能所以を知る然りと雖とも天下の事は多事なるへし百敗不屈今後形勢動止之時機により投身御奉公可申着目の次第も候間決る進退之事杯御周旋願候に之様御往反申上候には毛頭無之實々以御參考一端にも可相成哉と言上候事に御座候間心事分明に御推知可給候將又書類今一應中卿一見被致度内示候間若し御便宜も候は、尊公を御廻達不相成哉遠路往反甚心痛此段願試候早々以上

尙々言上書外に一事懸念候は幕より却る暴舉先する様の事は無之に哉薩藩杯の説に之は萬々有間敷旨に候得とも熟慮候得は大利を以誘候時は外夷も必援兵たるへし歩兵數萬を蓄ふ殊に方今の強兵の由必頼む所有ん會藩の歸國は止めたるなり旗本土追々呼登し且嚴令のよし頃日板閣老尹宮内々往反何らの事か

慶喜性果斷あり一步退けは一步の勢を失を知るへし退て弊れんよりはむしろ進んで幕中興成否を卜するの意なき能わさるにや右等宜御遠慮懇祈之事に候

尙々後日御迷惑に至り候も實に恐懼候間今度限り御往反申間敷候御安心可給候也

一四七 岩倉具視書翰 藤井宮内宛 慶應三年五月一日

上包 硯 大人

對 岳

不待貴答

追ふ本文之次第吳々不惡御承引可給候臣素り退去偷安と申に無之天下之事今日に止候と言には不可有却る是々多事なるへし形勢動止時機により必投身御奉公可仕底意に付其砌は又々御補助可給候百敗不屈臣常に慕ふ所に候早々以上

一書草略令進呈候彌御壯健欣然候寔に過日は建言一帖之義に付懇情來示不淺喜悅候粗漏之源取調候は、速に可爲分明候乍去實情はかねる依頼候者兩人計の足下御苦心に云々と吐露致候事正に有之候間爰に起り候義に相違無之存候左候得は其本全く臣眼力之不足所にし即不明粗漏之罪不可遁況やかゝる重事大藩貴主の密告之義右様輕卒に有は不可取と捨られ候も尤理り也熟々思慮候得は昨年御大變に最早愚忠哀訴するに所なく一身御奉公も眞に是迄と決心候得とも獨り御主人隅州之有る加ふるに兄弟懲察從來深情に預り候邊偏に依頼今日に至り候得とも御本藩には尙未た不解所之もの多く所詮不容事と推察之件々も有之候に付此上ために御周旋杯被下候は、乍如何却る御兄弟御迷惑筋にも可立至哉と懸念も候間暫く御傍觀可給候素り不肖臣萬々所令然衰運と放念之外更に意なく唯數年間御懇情報する之期なき遺憾のみ何れ可期面上不惡御承知可給候早々不備

五月朔日

對 岳

藤 井 殿
井 上 殿

二白過日御同藩士間々入來之旨やに來示何ら之行違候哉毛頭無之事又々何か離間行れ候哉と懸念候萬々深く御賢考可給候也

○
追啓彼建言一帖は勿論方今形勢に付愚見之趣種々書付中山正三大原之三卿の差出し取捨は諸卿に有のみ臣微忠之所は盡せりとし萬々遣却閉居然るに三卿に於て漏説杯之事は決る無之存候得とも此上又々行違等出來候は、遺憾百倍候間時宜に右内外書取一應一覽置御含頼入度存候今日出京候間時宜により明朝御苦勞御頼可申存候以上

五月一日當賀

一四八 中御門經之書翰

〔岩倉具視宛〕 慶應三年五月十六日

梅雨濛然彌御安全珍重に存候然は過日大久一件分り次第に可申上心得之處委敷難書取一寸參拜と存候得共雨下又は差支等に不克參上先荒々申入候

六日 四藩二公へ參入御人撰之事申入候處御一分御答難被成兩三日之内御答と申事

八日 國事之處前殿兩公共御不參に御決議に不至候

十日 四藩二公へ參入段々申入候處迎も役人取替も六ヶ敷旨欠役之處正三子大卿右申立候處予大卿兩人は何か彼是と被仰御承引なく右に付徳中長三申入候處漸此三人御承知に早々可取計旨御答之由何分兩人之處は幕へ御遠慮之旨扱々因循之事と申居候

石藥師卿は 御外戚役は六ヶ敷由に付國事掛願候處御承知と申事に候本人にも役は不望旨過日二公へ被申入候由旁御役は不出來と申事に候

十一日 正三徳中長三被 召正三長三は參朝段々御斷被申述候得共御斷
 難立所勞保養之上と申事之由長三は十四日御受到に相成正三は未だに候
 大久申候には先三人丈御受到に相成候様仕度則正三へは大久參り候徳中
 は土州へ申入候筈と申居候得共是は父公不承知之由に候間如何と存候扱
 々又公之偏執如何父子之間如此他人は被思遣候事に候
 十四日 國事有之何等之事も不相分候
 同日 四藩幕へ參入是又子細不承知に相分り候は、可申入候答御分りも
 候は、御示願入候
 備前とうか上京哉之風聞も有之候本脱土工合宜哉之旨承り先安心之事に
 候備も憤發上京相成候は、重疊之事と存候實否如何御分り候は、可示給
 候
 此頃頼と入來人無世事頼と不相分扱々不安心之事に候ケ様之事に、は逆
 も成功無覺束令心痛候誰歎世評探索之者ほしくと存候

右荒々申入候迎も委敷難書取誠ケ條書に、御推察願入候先右申入度如此
 候也

五月十六日

和 翁

北 山 大 人

内啓

(津田三藏
 は三河の人
 坂木靜衛の
 變名なり)

一四九 津田三藏書翰「岩倉具視宛」慶應三年五月十六日

奉謹啓候定、間違も可有之候得共一昨日四藩於御地郎之應接振聊承候に
 付申上候四人官の順を以て越薩土宇と着席之處大樹公先年來之情實且相
 續之事は御受候得共大任は固辭仕其人を被撰候て被任候様申上候得共強
 む之 勅故に不得止御受云々兵庫之事云々開港之事を盡力を頼む杯と流
 水之辨を以て被申候に付上席故越云々再度御建白之事は今般開港御尋之
 節御渡し故に拜見仕候得共右様に委細之事は始、承候と被申越は便所に

立候跡にて薩云兵庫之事咽喉要用之地故容易に被開候ては不相成且如横濱に於ては迎も人心不居合 皇國大亂之基に至り可申云々大樹公横濱の如きとは何事をやと改て詰問故に薩公云横濱之不宜と申は 勅許も無之唯幕府に於ては私之交易に於て更に信義不相立云々大樹又云く信義不立とは何事ぞ薩云信義不相立事は今更私共申上るに不及私方寸之内に有しとの答の處大樹大に不平之顔色也越云く長州之所置之事は私は此度之御大喪を以大赦被行候て其例を以被爲免候は、可然と存し大隅守容堂伊豫守に談候處三人は大に不服にて云く長州之事は既に尾張惣督下向之節謝罪之道相立候を再征之事故に長には罪は聊も無之候を大赦を以て被爲免候はは矢張り罪人之御あしらい故に迎も長防之人心居合不申と申候と越被申候處大樹云く三人之説尤也と被申候四人云く今節 朝廷之處大に御無人にて悉く不職之人々而已也仍て人才御擧用之事を再度迄四人罷出申上候處今に御決し無之大に御因循にて困ると申候處左様之事も有之しかと何

知らぬ顔之よしまだ一事容堂進出て被申候事有之候得共忘れ申候始めは大流水之辨に候ひし處終には一向不面目にて手をすり被居候よし委曲之事何分不文には書取りがたく是式之事に參上も恐入候間御推察奉希上候貳度め四藩參殿之節殿下云く中御門は先帝再應役には用ゆ間敷之御沙汰有之自分々譯て申上候事も候得共何分不 聞召云々薩云く 御遺勅一概等には難守左様ならば兵庫開港は 先帝斷然たる 御沙汰候得は猶更決て御開にて不相濟と申候得は殿下閉口之よし鷹公殊之外御邪論之よし大原中御萬里等之御擧用を云々と云て大に被拒候よし又會も常に參上兩三日之内に原市も參上全く幕論之よし可歎々々 於四藩は攝海開港説には相違有之間敷候中には兵庫は 御遺命も候得は暫く避て攝海之他所もと申説もあれと是中位之人之姑息説也於 閣下近況御聞之事は御洩し奉希上候

五月十六日

二白今日會津桑名肥後肥前久留米紀州六藩より薩等四藩士に新地一力に於て集會を乞候處薩土は斷り也

一過日奉希上候八木御都合次第可相成は急々奉願上候頓首謹言

○ 本文私申上候と申事は如何なる人にてても御無用奉願上候

北 様

三 藏

御側衆中様

拜上

一五〇 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年五月十七日

御參書拜見候御安全恐悅候抑申上候通り之次第實に急には難參其上成否如何と心痛之事に候迎も當職にゐは何事も埒明き不申終に

皇國之禍害に可至候深憂之事に候篤と同志申合二公へ斷然事情議論に罷出御辭職迄も申入候は、如何と決心之議も候得共何分大久暫默止可仕頼

みに候間夫も難行最早何事も如何成行候事哉と大に朦然歎息之至に候大卿にも大に、歎息之事に候唯々しんき、に存候

昨日正三議奏御受到に相成候

徳中は鷹前殿を御説得御受到に可相成様御取計之旨に候極秘に候右御受到に成候は、先役人は揃ひ候併柳葉飛は其儘にゐ頓と埒明き不申二公小子大卿は迎も御承知無之儀と存候間是非二公御辭職に不相成にゐは何事も不被行事と存候實に歎悲之事に候

世事承り度に付人之事申入候處御勘考人體有之候得共拜面ならてはと御申越承り候何事も箇様に因循之事而已にゐは迎も世事難分忠士も難立儀最早隠遁も可仕哉とも存し種々勘考扱々面白からぬ事而已歎息之外無之候此頃雨下續急に參拜も難仕儀何事も因循に打過ぎ詰り萬事不成就之事と存し候得は實に悲泣長歎無限候何れ晴に相成候は、參拜萬々可申述候得共實に歎息之外無之候二公御辭職に成候様御良策も思召御坐候は、御

垂命願入候

中卿事大卿にも大憤發歎息之事に候得共是は今度之事計に於は無之一昨々年復職御斷之節も同様之事被申立御斷と申事に候今度始て承り候事に候過日面會之節は尤左様之様子は更に無之相共に盡力可有之旨被申居候大卿面會之節も相互に宜く頼と申事之由に候如何之事哉と存候事に候右荒々申入候何ぞ御良策願度候折角是迄苦心仕候事故成功之道有之候は尤十分盡力可仕心得に候得共右様之次第如何と存候間實に憂愁之事に候何も御推憐願入候勿々不一

五月十七日

二白四藩幕へ出頭一件未相分に如何之事哉と是又心痛仕候程克事に候は、重疊之事と存候也

北 山 大 人

極秘御火中

和 翁

一五一 岩倉具視書翰并上石見宛 慶應三年五月十九日

萬一幕策の如く草莽之所置候は、却る貴國を如何言ん返す、今日之間之事は可有之に付真似深く探索祈念候

昨朝は御面働申入氣の毒に候其節は例之異論且失敬而已併如何にも苦心之餘り忌憚なく申入候次第不惡御承引可給候

隅州殿歸國無之旨先以て安心今度は頻年之御忠志御貫通之事と偏に欣喜候

幕變革大策之秘話真偽如何にや多分實事之旨小彦申候一昨夜も外に岩下

舊冬渡海外國內談振始終民部大輔新將軍へ申來る其要文全く薩討幕之

企に軍艦借用已下云々に付早々右手當可然密告之由也十四日前是は有

栖川宮家來話に候先日來原一梅澤の二人度々參殿帥宮御對面ある時佛國

より到來之趣近年毛利大膳父子同國に渡海之砌佛人寫真候圖之旨にて御

覽に入る宮大膳は能く似たり長門は不似なりとの御尊有之との事なり旁
愚考候得は外夷貴國説く所信用薄く幕の言ふ所倚頼とみへたり幕佛固結
之情好素より世人の所知に候得は英も亦いかん深御賢考祈念候
貴國折角御盡力之所深く氣の毒遠察之儀は滿朝公卿兎角因循之體ち一
身顧慮の意多きか實に今を捨て、何ぞ今を失て何日をか期せん此節之事
如何にも苦々敷事のみ終には幕の術中に陥ん者歟と苦慮仕候
幕中論之趣に公卿も懸念の分十に八九は吾物になれり最早可恐者なし列
藩も薩の外は強ての者なしとの事なり西にては因州東にて佐竹眞の勤幕
今度十萬金を借し
送りたる由なり追々幕中興成功之由なりと承候如何にや
櫻木公内府公すら幕あながち可惡にあらず薩もどうも不面白と或る藩は
御沙汰之由なり其根元は幕説く所薩には正義と唱候得共攘夷の念更に無
之殊に外夷と懇情を結び國中胡服に至り其振舞幕に増れり幕には癸丑以
來兎に角伺ひの上の事薩には私に如此に至れる事尤甚しと言へし亦始め

幕合體長を討ち長の閉塞して彌よ薩の上に出る不能を知て更に長扶助討
幕を計れる事如何にも奸謀なり殊に攝家など立置候ては云々に付先づ是
を變革せんとす抔と様々辨論致し其上金銀を投し周旋の旨に候薩合體の
公卿は凡て彼に籠絡せられ奸謀に役せらるゝ抔百方説諭の由追々迷惑の
人も有らん歟扱々遺憾之事に候

過日柳原の原一出頭英佛元より獨立帝國皇國亦然り依之是非天朝と
兄弟約を結ぶへし幕には外國ミニーストル同然と申立候様子素より當然
之事に亦は候得其實に苦心候處結局矢張幕と和親相成り大に安心に候此
調談に至り候迄は朝廷に對し實に苦心抔と申候由名分正敷様に申唱へ
實は幕威大に中興更張の策なるへし終に朝廷教主の如きか官位を出す
の問屋ならん往々又一家の神棚の如きに至るへし長大息の至り也
如是四方を籠絡八方に入手晝夜盡力而て御咄申入候秘策の如く大に變革
人心を取り候は、公卿にも一日の安最早十に一二も持論貫通不可有にや

草莽も亦十に二三も持論徹底不可有歟其上補幕一途にして英佛追々攝海に居住致候は、天下の大勢眞に一變再度之好機會有無如何にや後れたりと雖も謀は尙ほ今日に可有にや若し幕見込の如くに至り候は、十年來漸々此に至り候

朝權も亦如何可成行にや是迄數千人斃候者共も畫餅と成候事實に不忍之甚敷者に候萬一即今の所なすある事なり時機可待に被決候は、責めて四藩幕と立ち並て大變革の筋出來候丈には參り度ものに候返す、凡て今日之間大切と存候條深く勘考祈念候早々以上

五月十九日

對

硯 大 人

先達來旗本不服彼是異論風聞有之候處此節に於は大に平定の由右は新將軍相續之上は必ず故水老公之怨を報すへしと井伊安藤同時之徒大に異論新將軍廢論も有之候處慶喜是を察し張本を寛宥候は、下自ら治

るへしと今度安藤を赦し出仕申付候由依之同人は不申及新將軍には怨に報するに恩を以てする人なりと大に感服致候由安藤には長州再討之議も有之候は、報恩の爲め先鋒致候御事に候關東には異人三人は千石宛知行遣候屋敷地も遣候此節旗本同様居住出來候由此頃迄承り候廉内々御咄申入候定々齟齬可有之候得共御見合ともと申入候但し小子が申入と申事は足下限りに御心得可給候右承候に先きに彦と二條家家來の口と有栖川家來と非藏人とに候得共一通り聞き候人にも幕内通なと疑念可生候ては實に、殘心に候無左たに尹宮幕等往反有之哉に申候者も有之由なり能々御心得可給候且此書中此者へ申出し度候以上楠氏は泣男すら抱へ置けり御本藩は狐疑深く何とも殘念と申者ま、有之故に足下限り御心得可給候也

一五二 中御門經之書翰

岩倉具視宛

慶應三年五月廿一日

岩倉具視關係文書第三 (慶應三年五月)

三百五十一

今日は久々之快晴彌御安全珍重に候扱過日來之様子大久召寄及尋問候
去十六日四藩出府之處幕之兵庫開港之儀急務に候得共禁中御許無之内
實は大略可被許候得共何分四藩周旋無之候ては其場に不至四藩之勅許
相成候様周旋之事頼み候に付四藩にも開港は外夷之儀之二段之事國內治
合急務に候先長防所置早々裁判可有之申立決極左右方共申張其事は論定
無之引取候由

十九日 同上出府に付段々及議論候得共兎角同様之事に亦又々論着不仕
引取尙又篤と勘考可申出旨に候

右之通互に押合に相成扱々困入候事と申居候併四藩十分申合可周旋心得
之旨に候何分幕には開港之儀不宜儀も元より承知之事に候得共四藩に周
旋を頼み幕之罪を免候積りと見候へ共四藩は其謀に不預様長防所置急務
と申張候譯故中々急には難參と申居候内實は外夷之儀は差許有之當月中或
は六月早々表向き布告書取替可致約定之旨に候間幕には開港 勅許を差

急き候儀に候四藩にも其邊承知之事に候得共國內治り方急務故長防所置
早々裁判申立互に申張りに相成候何分にも申立之儀變動は不致貫徹可致
旨申居候

右之様子に亦も扱々六ヶ敷儀と存候併又々屹度勘考之筋も有之旨申居候
二公役邊之處も一向六ヶ敷 禁中之御評議之筋は小子大卿扱は 御遺言
難用と申候旨又四藩には宮中御差支之筋有之難採用旨御申張何共御意中
難分如何之御事哉と申居候併し是も屹度勘考之筋有之旨申居候
鷹前開幕之餘程手を入れ全く彼公幕方に御成之旨大久申居候小子も過日
一寸承り候儀有之候右は御焼後之爲御見舞金千兩幕より送り候に付受不
受大に議論有之候得共終に御受納に相成候由承居候間如何と存居候處果
して大久咄有之是人も最早見果たる人に候元より彼公は難用儀は兼承
知に候得共此節に至り尙金子に目を附候儀實に取に不足小人に候
十八日 四藩へ鯉十本酒等右各家老被召早速登京御満足に被思召候に付

右賜る旨尙十分勘考篤と被安宸襟候様相成迄滯京可有之旨被仰下候旨に候尤極々内々之由に候

右件は柳卿壹人周旋取計と申事に候全く誰歟彼卿へ申入候者可有之彼卿之心にも無之哉と存候 大卿にも簡様に打過ぎ不思儀存意有之大久に被及内談候得共何分唯今何事に不寄申出候共迎も難立却る禍根に可相成暫く之處は沈黙可然自然四藩周旋盡力之上難被行筋は存分周旋可有之右様に相成候るは迎も尋常之儀にても難相成非常之所置と申居候先夫迄は必々沈黙に頼度旨申居候小子には色々存居候得共唯今兩人之内申立候儀は却る害而已可生と存候間唯々苦心歎息之外無之候

右等荒々申入候何れ不日參入萬々可申述候何分餘程六ヶ敷事と存候決極爭戰と見込候扱々歎ヶ敷世の中如何成行可申哉と深々苦心仕候得共先十分周旋程克可致心得之旨に候間むざと出頭申出之儀も難仕廿二人之外に五六人程も二公に參入事情斷然と議論致し彼公御心底不分處急度相糺

時宜に依り御辭職と迄談判候人體有之候は、と存候得共迎も左様之人は無之又當職此儘に何事も不被行と存候實に長歎息之至に候何卒宜く御智惠拜借願上候右京參候に付荒々申入候尙不日拜上候早々以上

五月廿一日

和 翁

北 山 大 人

一五三 香川敬三書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年五月廿一日

稽首再拜言上候益 御機嫌克被爲渡奉恐悅候陳は近日之形勢夙に一二件承り候處過日四藩大樹家に被行向候る激談に及候由其中にも薩越盛之由に先つ曰長州處置之義其處を失し候々天下亂基を醸し大變に立至り候是は去る年尾張大納言殿問罪之惣督を蒙り下向致候處長も則暴動之罪に伏し三老臣之首級を斬り問罪に答候處承知之旨に處置相濟候處いかなる譯にや再討之 勅を請ひ竟に將軍家進發に相成今日迄之大變を醸し候

次第是則直は彼に在り曲は此に在り如是曲直之辨分明なるの上は速に入京をさし許し可申旨申出る又曰兵庫開港之義過日奏聞に相成候處諸藩衆議不被爲開召内は必開港不相成旨御沙汰之處頃日承り候處既に今年中に開港可致旨外國へ條約書申渡し候段英國人下の關に於る顯泄致候趣是は如何之事歟實不容易大重事件此義返答承知致度旨詰責致候處將軍家更に無言再三詰り候處何れ此義は過日返答可致旨答に相成候由土州は大激にる小笠原壹岐守之奸物を退けざる内は天下之事百事不成これを早々退け可申旨三度申出候由前言は薩越之由宇和島は何を申候や承り不申右返答承り之義一昨日薩始罷出候由其後之處如何相成候哉承知不仕候しかし大分妙に相成申候

一天朝の四藩の伊丹三樽鯉十尾つゝ賜候由昨夜承り候

一 本國寺之者一昨日又復三十人計り何方とも不知脱走仕候右此頃承り候事故言上仕候恐惶頓首謹言

五月廿一日

彦

拜上

言上

一五四 中御門經之書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年五月廿五日

口上

昨日之件委細は賢息賢孫の御聞取之通り實に絶言語候次第何共悲歎此事に候乍去此上は急度御勘考も可有之岩倉村樵夫は御止め今一段御盡力大藩奮發候様願度候内奸誅戮斷然 朝敵之名を以て討幕之外無之候と存候實に無申條次第柔術之道は相絶候儀急度討幕之策と存候貴君には如何御思召候哉小生は右之外無之と存候間何卒く御盡力願度候善極る生惡惡極る生善彼幕暴之極に候間急度被討 皇國御挽回此時と存候併し右奮起之者無之には難得候儀何卒御盡力願入度候今日參拜と存候處明日は

内々正忌に付不克參上候乍失敬以書中申上候尙委細は拜上心事可申述候
實に極秘之秘に候御覽後早々御火中願入候也

五月廿五日

和 翁

北 山 大 人

(大橋慎は
慎三、又橋
本鏡猪とも
稱す土州の
人也)

一五五 大橋慎書翰「岩倉具視宛」慶應三年八月十五日

尊筋奉拜讀候然は巷説に付御苦心被爲在候御次等御尤御義奉存候原一之
義全實説に於則昨朝同人宿所に於る幕臣三輩と何か議論激溢之餘打果し
原一の首を斬て立出て板倉閣老邸に參り候處首持參に付門番應接喧紛之
間原一家來共追掛け參り遂に原賊を誅し候三人戰死或は割腹に及候趣に
御座候薩州は決る歸國は不仕候隅州保養之爲め下坂と申事に御座候必御
安心被爲在度奉存候尙委細は參殿之上にて言上可仕候得共尊命に奉隨草
略如斯御座候恐惶謹言

八月十五日

大 橋 慎

尊 下

尙々香川他出仕候に付私右御答申上候宜御取成奉願候以上

一五六 高木慎書翰「岩倉具視宛」慶應三年八月十八日

誠惶謹白

(高木慎は
大橋慎三と
同人也)

一土國之形勢粗判然仕候

嘗月六日英船入港之處後藤象次早速乘込所謂サトウなる者等へ面會尤
此日は渠が主意之應接は不仕候積り之趣に候處象次種々之談話を遂に
此度之事件談判に立至り色々入組候義も有之候處象次夫々判然應接仕
り渠大に氷解仕候趣渠素が兵威を以て壓倒可仕勢にて應接中或は紛々
議論致候より戦争に於勝負可仕との異言も有之候處象次申候には我れ
聞く海外各國は名義曲直を明にして後戦争に決る無名曖昧之師なしと

然るに今日之事件虚實未だ分明ならず卒然戰爭に及ぶは名義曲直如何可有之哉我藩に於ては未だ妄に兵端を開く之意なし然といへとも是非戰爭すべしと其方より兵端を開けは我豈敢て戦はさらんや則一戦に及ぶべし唯其方義理の有る所を回顧する事可なりと申す應接も有之候も渠も服し候趣然に右夷人を斬り候嫌疑を受候土人崎陽に滞在仕居候に付直に此者を糺問致候得は虚實分明也と申事に遂に土人佐々木三四郎才谷梅太郎英人幕吏同伴に崎陽へ参り候趣土國に應接之次第夷人之情態等に相考候時は更に異亂に不相及候事必然之取勢と被察孰も一先安心仕候就は不遠土兵も上京に相成可申は瞭然に御座候且諸藩も兼之志益振起之模様にも快然之方に御座候

一 忍びすと申唱へ候事外夷へ對し不敬と相見へ已に浪華邊は戎橋戎島橋杯總る忍びすの字を改め候も布告に相成り居候趣則觸書見受候者之嘶に御座候實に屈辱之至り不堪切齒候

一 原市快々愉々前祥と可申奉存候

尙萬々拜謁言上可仕奉存候得共先は承り候新聞草々奉達尊聽度如此御座候可然御序に御披露奉依頼候恐懼敬白

八月十八日

高 木 慎

再拜稽首

御 側 中

一五七 岩倉具視書翰〔岩倉具視・同具定宛〕 慶應三年九月七日

内々示談候

此頃仁門驚朝臣等事件に付探索甚敷旨先日來承り居候得共尙再發にて嚴重趣に候間大夫事早々五條家彼書籍借用に參左に申入候事件得と可承候其様子に彦始め出入見合候様早々所置致度存候事に候

五條中御門息へ被申入息を昨日父卿へ被申入父卿承り候事に付誤

傳多くと存候間直に得と承り候様存候

仁門脱走説鷺卿一舉説確説有之哉に於四五日前仁門尹宮に招き詰問翌日中院御使に於御調中之旨一事公家へ武家藩又草莽士出入嚴重夫々取調最中との一事

仁門鷺卿等之外々今二三人急度不取調候は、不相成二家有之との一事
鷺卿家來被召捕候者は名前如何申候哉此は何歟吐露候譯か

右之條々に於候五條に得と御聞可給候先日も中院御使とやら尹宮に於御詰問とやら承り候其燒直し之嘶しに於若し實事に於證據に候へは早々彦始め心得申入度候

此事件兩人の外宇三郎には内々得と申入同人事城多方へ參承り合候へは可分と存候亦同人但馬方へ遣候小子を内々頼候旨に於如何之風聞と御聞せに於もよく兎に角能々示談五條城多等又但馬聞合候へは凡分り候事哉と存候

俄に早々朝新三郎事下鴨昇造方へ出し此文遣候事故返事分り次第鴨迄御越候御は相分り申候又宇三郎口上能々分り候事亦内外凡之事は承知候事故に宇三郎新三郎も得と申聞候へはよろしくと存候
右早々如此候也

九七

采女にも内々嘶し置よろしく併婦人向には決してく嘶し無用く

對

侍 從
殿 極内々啓
大

一五八 正親町三條實愛書翰「岩倉具視宛」慶應三年九月八日

御安全奉賀候然は今朝大久保入來隅州所勞兎角同容に付今日歸國願書可差出由且爲名代同姓備後上京隅州趣意貫徹之處は屹と盡力可有之由に候

右大久保參上可申上候へ共多忙に付一寸申上くれ候様申居候間荒々啓上候大原卿へも一寸御通達置可給候也

九 八

追ふ委細拜時可申解候也

左大丞相公君

極内啓上

實 愛

一五九 岩倉具視書翰「大久保市藏宛」慶應三年十月七日

尙々昨日之出會實に令喜悅候今日之機誓亦不可失事と祈念之外無之申すも愚に候得共此上益御盡力頼入候品川にも宜敷御鶴聲可給候也昨日は久々にあ出會多年之宿志貫徹欣喜此事に候爾來彌御壯健令賀候扱今朝は兩士上京云々彼卿へ御通達早速令傳承候幸甚不過之程なく山卿入來之旨に候間萬々熟談午後否可申入候將内密入一覽候二通之儀は實以大

事なる物ならんか聊忌憚なく存分に作文之事偏に頼入候若し急迫場合に至り卒爾之品出來候は萬世之遺憾右に付始め書試候一紙又々見合にもと差出兎も角吳々よろしく頼存候早々以上

十月七日

對 岳

大久保殿

一六〇 岩倉具視書翰「井上石見宛」慶應三年十月九日

過日御報忝存候

一秘愚見一帖熟覽返却之旨承候元より赤面申計なく候得とも

朝廷今日の御大事戊午以來未曾有の御場合と存候より兼ては世事遺却と申入候邊に齟齬如何なから不可止至情を草の儘入一覽可否討論加墨教示を受候上清書致し實は内々中卿え心得迄に申入度存候に付此比には是非申下度候必々討論入筆頼存候事に候

一 貴藩上京不速は頗殘心の事と竊に苦心候乍去何れ御上京の風聞先以安心此事に候ものとして詩曰靡不有初鮮克有終

遠くは先大守立志より近くは壬戌勤王義舉而して數年の間出沒種々轉變すと雖も聊撓ます終に今日に至り萬々貫通の所と仰喜比するに物なし願くは登京事實承度候

一千印より度々如何之振合にやと催促困り居候間舍兄返書頼度候定而御心配も可被下存候得とも其上は無是非次第御見込之通り御一筆の様御傳言頼候

一 小子にも從來の歎息は言迄なく候得とも只々貴藩一筋の道有而已晨昏の依頼に候所過日申述候通りに付何卒有様の御模様内示頼度候追々觀念決る女々敷苦慮すましく愚見も立候間何卒々々此件内報頼度候
右早々如此候家來田中采女と申者差出候間一帖も御渡しに而不苦候仍要用而已如此候也

十月九日

對

硯 大人

尙々一帖空論而已と一笑察し入候得とも臣意底には彼中一二は是非ケ様にもと渴望の次第も候間是非々々中卿は可申入心得に付眞實討論頼入候中卿に而談合候は、十に二三は可被容次第に付萬々一誤は不容易件々と存候間返す、腹藏なく加筆頼候實に一存に而は決し難くさりとて一言不可洩大事而已足下より談する所なく深く憐察頼候尤足下往反の事終身誓ふ申間敷候間安心にて十分御論し頼候早々以上
此比徳中原梅等種々周旋の様子頗る狼狽之形ちと申事に候右は兎も角亦兩役中彼是尹代役に被勤候との風聞扱、、、、、歎息の限り何か防禦の術もなからんにや貴藩上京僅かの間辛抱不成人々あきれ果候也

熊澤了海

植てみよ花のそたゝぬ里もなし

所からこそ身はいやしけれ

公卿多くは補佐にあらんか

一六一 坂木靜衛書翰〔岩倉具視宛〕 慶應三年十月九日

奉謹啓候昨日は參殿大失敬何共奉恐縮候今朝御本殿に罷出奉窺候處梅溪様は肥を云々山本様云々之事彼一件に對し好大事と奉存候尤閑叟に於ては虚喝たる事は顯然に候へ共大に我策に聲援と相成兩役邊之膏盲に徹し可申候

一 元三條實美始五人之者大坂表に被召寄候趣相達置候處其儘被差置候間爲心得相達候

右薩始御守衛五藩の幕を達に相成候御沙汰之云々竹原に被通候處尙序之砌宜申上候様申聞候頓首謹言

十月九日

靜 衛

再拜

北 山 公

御近習中

一六二 岩倉具視書翰〔大久保市藏宛〕 慶應三年十月十六日

昨夜は御苦勞一件更に申入候通り左印の發露分明之上は無是非候得共姓名亦文意巨細は吐露有間敷と被察候間小氏より村士御都合に而聞誤り位之處に出來候は、三卿之處は如何様にも安心被成候様可相成と存候將今朝は不存寄兩士を奇品外に二種目錄之通り惠贈扱忝存候受納も不本意候得共當今急務之品柄忝申受候萬謝萬謝廣士にもよろしく傳聲頼存候早々不備

(奇品は短筒也)

(北岡正治は岩倉の變名也)

十月十六日

北 岡 正 治